迫害者たちの死について

ラクタンティウス
藤遥　制作

1〜6章　序と初期の迫害者たち

1:1 親愛なるドナトゥスよ、主はあなたの祈りをお聞きになりました。あなたが日ごとに、どの時にも、主の御前で注いできた祈りです。主は、わたしたちのほかの兄弟たちの祈りもお聞きになりました。彼らは栄光ある告白によって、信仰の功に報いる永遠の冠を自分のものとしたのです。1:2 見てください。敵はみな滅ぼされ、世界じゅうに平穏が戻りました。少し前まで打ち倒されていた教会は、再び立ち上がります。不敬虔な者たちが倒した神の神殿は、主のあわれみによって、前よりも大きな栄光のうちに建てられていきます。1:3 神が皇帝たちを起こしてくださったからです。彼らは暴君たちの邪悪で血なまぐさい支配を断ち切り、人類のために心を配りました。こうして、いわば最も悲しい時代の雲が吹き払われました。今は、喜ばしく晴れやかな平和が、すべての人の心を喜ばせています。1:4 今、暗い嵐の激しいつむじ風が過ぎて、穏やかな空と待ち望んだ光が輝き出ました。今、神はしもべたちの祈りに心を和らげ、倒れて苦しむ者たちを、天の助けによって起こしてくださいました。今、神は不敬虔な者たちの共謀を消し去り、嘆く者たちの涙をぬぐってくださいました。1:5 神をあざけった者たちは、倒れています。聖なる神殿を倒した者たちは、いっそうひどく崩れ落ちました。正しい人々を責めさいなんだ者たちは、天からの打撃と当然の責め苦を受けて、罪深い魂を吐き出しました。1:6 たしかに遅くはありました。けれども、重く、ふさわしい罰でした。神が彼らの罰を延ばしておられたのは、彼らに対して、大いなる驚くべき見せしめを示すためでした。それによって後の人々は、神が唯一であることを学ぶのです。また、同じ神が審判者として、不敬虔な者と迫害者たちに、ふさわしい刑罰をお下しになることも学ぶのです。1:7 そこで、彼らの最期について証ししておくことにしました。遠く離れていた人々も、のちに生まれる人々も、みな知ることができるためです。知ってほしいのは、いと高き神が、ご自分の名の敵を消し去り滅ぼして、どれほどの力と威厳をお示しになったかということです。とはいえ、話を初めから述べても、的外れではないでしょう。教会が建てられたときから、だれが教会を迫害したのか、天の審判者の厳しさがどのような罰で彼らに報いたのかを述べるのです。

2:1 ティベリウス・カエサルの治世の終わりのことです。書物で読むとおり、わたしたちの主イエス・キリストは、ユダヤ人によって十字架につけられました。二人のゲミヌスが執政官であった年の、三月二十三日の後のことです[1]。2:2 主は三日目によみがえると、弟子たちをお集めになりました。弟子たちは、主が捕らえられたことを恐れて、逃げ散っていたのです。主は四十日のあいだ彼らと共にとどまり、彼らの心を開いて、聖書を解き明かしてくださいました。聖書は、そのときまで暗く閉ざされていたのです。そして主は彼らを任じて、ご自分の教えと教理を宣べ伝えるために整えてくださいました。こうして、新しい契約の厳かな定めをお整えになったのです。2:3 この務めを果たし終えると、雲の嵐が主を包み、人々の目から主を隠して、天に運び去りました。2:4 それから弟子たちは、そのとき十一人でしたが、裏切り者ユダの代わりにマッテヤを、さらにパウロを加えました。そして福音を宣べ伝えるために、全地に散って行きました。師である主が、彼らに命じておられたとおりです。彼らはネロの治世の初めまでの二十五年のあいだに、すべての属州と町々に、教会の土台を据えました。2:5 すでにネロが帝位にあったとき、ペテロがローマに来ました。彼はいくつかの奇跡を行いましたが、それは、神ご自身の力により、神から与えられた権能によって行ったものです。こうしてペテロは多くの人を義に立ち返らせ、神のために、忠実で堅固な神殿を据えました。2:6 このことがネロに知らされました。ネロは、ローマばかりでなく至る所で、日ごとに大勢の人々が偶像礼拝から離れていくのに気づきました。人々は古いものを退けて、新しい宗教に移っていったのです。ネロは忌まわしく害をなす暴君でしたから、天の神殿を打ち壊し、義を滅ぼそうと飛びかかりました。そして、だれよりも先に神のしもべたちを迫害し、ペテロを十字架につけ、パウロを殺しました。2:7 けれども、ネロは罰を免れませんで

した。神が、ご自分の民の苦しめられるのを顧みてくださったからです。そこで、この抑えのきかない暴君は、帝位の頂から投げ落とされ、高みから転がり落ちました。そして突然、どこにも姿を見せなくなりました。こうして、これほど悪い獣には、葬られる場所さえ地上に見当たらなかったのです。2:8そのため、正気でないある人々は、ネロが移されて、生きたまま取っておかれていると信じています。シビュラが、『母を殺した者が、逃亡者となって地の果てから来る』と言っているからです。最初に迫害した者だから、その同じ者が最後にも迫害し、反キリストの到来に先立つというのです。しかし、それは信じてはならないことです。ある聖徒たちは、二人の預言者が生きたまま移されたと告げています。キリストがお降りになるときの、その聖なる永遠の支配の前の、終わりの時のためだというのです。正気でない人々は、それと同じように、ネロもまた来ると考えているのです。地を荒らし人類を滅ぼすために来る悪魔の、先駆けとなり、先導となるためだというのです。

3:1その後、何年かをおいて、彼に劣らない、もう一人の暴君ドミティアヌスが現れました。彼は憎まれる支配を行いましたが、それでも、支配下の人々の首の上に、きわめて長くのしかかり、無事に治めました。それも、主に対して不敬虔な手を伸ばすまでのことでした。3:2しかし、ダイモンたちにそそのかされて正しい民を迫害し始めると、彼は敵の手に渡されて罰を受けました。家で殺されたことだけでは、報いとして十分ではありませんでした。その名の記憶までも消し去られたのです。3:3彼は多くの驚くべき建物を造り、カピトリウムやほかの名高い記念の建物を建てていました。けれども元老院は、彼の名をどこまでも追い立てました。彼の像も碑文も、跡を一つも残さなかったのです。そして死んだ彼にさえ、決議によって、永遠の恥となる烙印をきわめて重く押しました。3:4こうして暴君の定めたことが取り消されると、教会はもとの状態に戻されただけではありませんでした。前よりもはるかに輝かしく、華やかに栄えたのです。その後の時代には、多くの良い皇帝たちが、ローマ帝国の舵を取り、治めました。教会は敵の攻撃を一度も受けることなく、東と西に手を伸ばしました。3:5ついには、神の宗教が入り込まなかったほど遠い地の片隅は、もう一つもなくなりました。どれほど荒々しい習わしで暮らしていた民も、神を礼拝するようになって、義のわざへと和らいでいきました。しかし、その後、長い平和は破られました。

4:1それから長い年月の後、忌まわしい獣デキウスが現れて、教会を苦しめました。悪人でなければ、だれが義を迫害するでしょうか。4:2そして、まるでそのために帝位の頂に上げられたかのように、すぐさま神に逆らって荒れ狂い始めました。それは、すぐさま倒れるためでした。4:3デキウスは、そのころダキアとモエシアを占領していたカルピ族に向かって、出陣しました。そしてたちまち蛮族に囲まれ、軍の大部分とともに滅ぼされました。彼は葬りの礼さえ受けられず、着物をはがれ、裸のまま、獣や鳥のえさとして横たわりました。神の敵にふさわしい最期です。

5:1その後まもなく、ウァレリアヌスもまた、同じような狂気に取りつかれて、神に向かって不敬虔な手を振り上げました。そして短いあいだに、正しい人々の血を多く流しました。しかし神は、新しく類のない罰を彼にお下しになりました。神の敵対者たちは、いつでも自分の悪にふさわしい報いを受けます。そのことを、後の人々への戒めとするためでした。5:2彼はペルシャ人に捕らえられ、おごり高ぶって用いていた支配だけでなく、ほかの人々から奪っていた自由も失いました。そして、この上なく恥ずかしい奴隷の身で生きたのです。5:3彼を捕らえたペルシャ人の王サポルは、車や馬に乗りたくなると、いつもこのローマ人に身をかがめさせ、背中を差し出させました。そして彼の背に足を載せ、あざ笑って責めるのでした。「これこそ本物の凱旋だ。ローマ人が板や壁に描くものとは違う」。5:4こうして彼は、まことにふさわしく凱旋の見せ物とされたまま、しばらく生き長らえました。そのために、ローマの名は長いあいだ、蛮族のなぶりものとなり、笑いものとなったのです。5:5さらに、罰として次のことも加わりました。彼には皇帝である息子がいたのに、捕らわれの身とこの上ない隷属の恨みを晴らしてくれる者を、見いだせませんでした。返還を求められることさえ、まったくなかったのです。5:6そして、その恥辱のうちに恥ずべき一生を終えると、彼は皮をはがれました。肉からはがれたその皮は赤く染められ、蛮族の神々の神殿に置かれました。最も輝かしい凱旋を記念するためです。それはいつも、わたしたちの使節たちに見せつけられました。ローマ人が、捕らわれた皇帝

の皮をその神々のそばに見て、自分たちの力を頼みすぎないようにするためでした。5:7 神は冒涜者たちに、このような罰をお科しになりました。それなのに、その後も、万物を治め保っておられる唯一の神の威厳に、逆らう者がいました。行いに移すことはもちろん、心に思うことさえ、あえてしたのです。驚くべきことではありませんか。

6:1 アウレリアヌスは、生まれつき狂暴で向こう見ずな人でした。彼はウァレリアヌスが捕らわれたことを覚えていたのに、その罪と罰を忘れて、残酷な行いによって神の怒りを招きました。しかし彼は、企てたことを成し遂げることさえ許されず、その狂気の初めのうちに、たちまち命を絶たれました。6:2 彼の血なまぐさい書状は、まだ遠くの属州に届いていませんでした。そのときにはもう、彼自身が、トラキアのカエノフルリウムという所で、血にまみれて地に倒れていたのです。ある根拠のない疑いのために、側近たちに殺されたのです。6:3 これほど多くの見せしめによって、後の暴君たちは抑えられるべきでした。ところが彼らは恐れなかったばかりか、いっそう大胆に、いっそう思い上がって、神に逆らったのです。

訳注

1 『後』は書き誤りで、三月二十三日のこととも考えられる。

7〜9章　四人の皇帝

7:1 ディオクレティアヌスは、悪事を考え出し、災いをたくらんだ人でした。彼はすべてを損ないながら、神にさえ手を出さずにはいられませんでした。7:2 彼は、貪欲と臆病によって、世界をくつがえしました。すなわち、世界を四つに分けて、三人を自分の支配にあずからせ、軍隊を増やしたのです。四人はそれぞれ、昔の皇帝たちがひとりで国を治めていたときよりも、はるかに多くの兵士を持とうと競いました。7:3 こうして、国から受け取る者の数が、国に納める者の数よりも多くなり始めました。課税があまりに重く、農民たちの力は尽き果てました。そのため畑は捨てられ、耕地は森に変わっていきました。7:4 そして、すべてを恐怖で満たすために、属州もまた細かく切り分けられました。多くの長官と、さらに多くの役所が、一つ一つの地方に、いや、ほとんど一つ一つの町にまで、のしかかりました。同じように、会計官や管理官や道長官の代理も大勢いました。彼らはみな、民事の裁きはめったに行わず、有罪の判決と財産の没収ばかりを重ねました。数えきれない品々の取り立ては、たびたびというより、絶え間なく続きました。そして、その取り立てには、耐えがたい不正が伴ったのです。7:5 兵士を養うための負担さえ、耐えられるものではありません[1]。また彼は、飽くことのない貪欲から、財宝が減るのを決して許しませんでした。いつも臨時の財や、下賜に充てる金をかき集めていました。しまい込んだものを、手つかずのまま損なわずに保っておくためです。7:6 また彼は、さまざまな不正によって物価をひどく高くしておきながら、売り物の値段を法で定めようとしました。7:7 そのときには、わずかな安い品のために、多くの血が流されました。売る者は恐れて、品物を何一つ店に出さなくなり、物価はいっそうひどく上がりました。ついに、多くの人が命を失った後で、その法は、どうにもならなくなって廃されたのです。7:8 そのうえ、建てることへの果てしない欲がありました。それに劣らず大きかったのが、属州からの取り立てです。働き手や職人、荷車をはじめ、建物を造るのに要るものを、何でも差し出させたのです。7:9 ここには公会堂、ここには戦車競走場、ここには造幣所、ここには武器の工房、ここには妻の館、ここには娘の館というふうでした。突然、町の大部分が取り壊されます。人々はみな、妻や子供を連れて移っていきました。まるで町が敵に攻め落とされたかのようでした。7:10 そして、属州を滅ぼすほどの犠牲を払ってこれらが仕上がると、彼は「うまくできていない。別のやり方で造れ」と言うのでした。そこで、また取り壊して造り変えなければなりませんでした。それもまた、いずれ壊されるかもしれないものでした。こうして彼は、ニコメディアをローマの都と肩を並べさせようとして、いつも正気を失っていました。7:11 財産や富のために、どれほど多くの人が命を落としたかは、もう言わずにおきます。悪がはびこるのに慣れて、それはありふれた、ほとんど許されたことになっているからです。7:12 しかし、彼にはとりわけ目立つことがありました。よく手入れされた畑や、ひときわ立派な家を見ると、たちまちその持ち主に、言いがかりと死刑が用意されたのです。まるで、血を流さずには、他人のものを奪えないかのようでした。

8:1 では、その兄弟分で、ヘルクリウスと呼ばれたマクシミアヌスはどうでしょうか。彼もディオクレティアヌスと変わりませんでした。二人は心が一つで、考えも同じ、望みも等しく、意見もそろっていたのです。そうでなければ、あれほど忠実な友情で結びつくことはできなかったでしょう。8:2 二人の違いはただ一つでした。ディオクレティアヌスは貪欲がより強く、臆病さもまさっていました。マクシミアヌスは貪欲がより弱く、気概がまさっていました。それも、善を行うためではなく、悪を行うための気概です。8:3 彼は帝国の本拠そのものであるイタリアを押さえ、アフリカやヒスパニアのような、きわめて豊かな属州も従えていました。そのため、有り余るほどの富を、それほど気を配って守ろうとはしませんでした。8:4 そして必要があれば、きわめて裕福な元老院議員たちには事欠きませんでした。仕組んだ密告によって、帝位をねらったと言い立てられる者たちです。こうして、元老院の目とも言うべき人々が、次々にえぐり取られて

いきました。血にまみれた国庫は、不正に手に入れた富であふれていました。8:5 さらに、この疫病のような男の情欲は、男たちを汚すことに向かいました[2]。それは憎むべき、忌まわしいことです。それればかりか、名士たちの娘を辱めることにも向かったのです。彼がどこを旅しても、娘たちが親の腕から引き離されて、すぐさま差し出されました。8:6 こうしたことで、彼は自分を幸せだと思っていました。情欲と悪い欲望に何一つ拒まなければ、それで自分の支配の幸いは保たれると考えていたのです。8:7 コンスタンティウスのことは言わずにおきます。彼はほかの者たちと違い、ひとりで世界を治めるにふさわしい人だったからです。

9:1 もう一人のマクシミアヌス（ガレリウス）は、ディオクレティアヌスが婿に迎えた人です。彼は、わたしたちの時代が身をもって知ったこの二人よりも悪かっただけでなく、これまでのすべての悪人よりも悪い人でした。9:2 この獣には、生まれつきの野蛮さと、ローマ人の血にはない荒々しさがありました。驚くことではありません。彼の母はドナウ川の向こうの生まれで、カルピ族が攻め込んできたとき、川を渡って新ダキアに逃げてきた人だったからです。9:3 体つきも、その性格に似つかわしいものでした。背が高く、肉は大きく、恐ろしいほどの大きさに広がり、ふくれ上がっていました。9:4 つまり、言葉も、ふるまいも、見た目も、すべての人にとって恐怖と恐れのもとでした。義父のディオクレティアヌスでさえ、彼をひどく恐れていました。その恐れのわけは、次のとおりです。9:5 ペルシャ人の王ナルセウスは、祖父サポルという身内の手本に駆り立てられ、大軍を率いて東方を奪おうとねらっていました。9:6 ディオクレティアヌスは、騒ぎのたびにおびえ、気落ちする人でした。このときは、ウァレリアヌスの例も恐れていたので、自分から迎え撃つ勇気が出ませんでした。そして婿をアルメニアを通って送り出し、自分は東方にとどまって、成り行きをうかがっていました。9:7 婿は待ち伏せを使いました。蛮族には、身内をみな連れて戦に出る習わしがあります。そのため彼らは、人の多さに足を取られ、荷物にふさがれていました。婿は、そうした彼らをたやすく打ち破りました。そして王ナルセウスを敗走させると、おびただしい略奪品と戦利品を携えて戻りました。こうして、自分にはおごりを、ディオクレティアヌスには恐れをもたらしたのです。9:8 この勝利の後、彼はたいへん思い上がって、もう副帝という名を拒むようになりました。自分にあてた手紙でその名を聞くと、彼は恐ろしい顔つきと声で、「いつまで副帝でいろというのか」と叫ぶのでした。9:9 それからは、ひどく傲慢にふるまい始めました。まるで第二のロムルスのように、自分はマルスから生まれたと人に思わせ、そう呼ばせようとしたのです。そして、自分が神々の血を引くと見せるために、母ロムラを、淫らな交わりをしたとそしって辱めることさえ選びました。9:10 しかし、彼の行いについて語るのは後に回します。時の順序を乱さないためです。義父が位をはがれ、彼が皇帝の名を受けてから、いよいよ荒れ狂い、すべてを侮るようになったのです。9:11 ディオクレスは、帝位につく前はそう呼ばれていました。彼は、このような策とこのような仲間によって国を覆し、その罪のためにどんな報いを受けても当然でした。それでも、正しい人々の血で手を汚さないあいだは、この上ない幸運のうちに治めたのです。9:12 では、彼がどのようなわけで迫害を始めたのかを、これから述べましょう。

訳注

1 写本には否定の語がなく、『これも耐えられる』とも読める。

2 写本の字のままでは『男たちを』ではなく『風紀を』となる。

10〜14章　迫害の始まり

10:1 ディオクレティアヌスが東方の地方にいたころのことです。彼は臆病なあまり、行く末をあれこれ探る人でした。そこで家畜を屠ってささげ、その肝臓に、これから起こることを尋ねていました。10:2 そのとき、仕える者のうち、主を知る者たちが何人か、犠牲をささげる彼のそばに立っていました。彼らは自分の額に、不死の印を付けました。すると、ダイモンたちは追い払われ、儀式はかき乱されました。腸卜師たちはうろたえました。内臓に、いつものしるしが見えなかったのです。そして、吉兆が得られなかったかのように、何度もいけにえを屠りました。10:3 しかし、いくら屠っても、いけにえは何も示しませんでした。ついに、腸卜師の長のタギスが言いました。疑いからか、何かを見たからかは分かりません。「儀式が答えないのは、汚れた者たちが神事に加わっているからです」10:4 すると皇帝は怒りに狂い、儀式に仕える者だけでなく、宮殿にいるすべての者に、供え物をささげるよう命じました。拒む者は鞭で罰せよというのです。さらに指揮官たちに手紙を送り、兵士たちにも忌まわしい供え物を強いるよう命じました。従わない者は軍から追い出すというのです。10:5 彼の狂気と怒りは、ここまででとどまりました。それ以上は、神の律法にも宗教にも、何一つ逆らうことをしませんでした。10:6 それからしばらくして、彼は冬を過ごすためにビテニヤに来ました。そこへ、副帝マクシミアヌス（ガレリウス）も、悪意に燃えてやって来ました。すでに迫害に手を付けていた愚かな老人を、キリスト者の迫害へとけしかけるためです。わたしの知るところでは、副帝のこの狂気のわけは次のようなものでした。

11:1 この副帝の母は、山の神々を拝む人でした。たいへん迷信深い女で、ほとんど毎日、ごちそうを並べて供え物をささげ、村の人々に宴をふるまっていました。キリスト者たちは加わりませんでした。母が異邦人たちと宴を楽しむあいだ、彼らは断食と祈りにはげんでいたのです。11:2 そのため、母はキリスト者を憎むようになりました。そして、自分に劣らず迷信深い息子を、女の愚痴でけしかけ、この人々を除かせようとしたのです。11:3 こうして二人は、冬のあいだずっと相談を重ねました。だれも入れられなかったので、だれもが国の一大事が話し合われていると思いました。老人は長いあいだ、副帝の狂気に逆らいました。世界を騒がせることがどれほど害になるかを説き、多くの人の血が流されることになると言いました。キリスト者たちは喜んで死ぬのが常だ、宮殿の者と兵士にだけこの宗教を禁じれば十分だ、というのです。11:4 それでも、向こう見ずな男の狂気をそらすことはできませんでした。そこで、側近たちの意見を聞いてみることになりました。11:5 というのも、ディオクレティアヌスには、こんな悪い癖があったのです。善いことをしようと決めたときは、自分がほめられるように、だれにも相談せずに行いました。しかし悪いことのときは、それが非難されると分かっていたので、多くの者を相談に呼びました。自分の過ちを、ほかの人々の罪にするためです。11:6 こうして、わずかな文官とわずかな武官が招き入れられ、位の高い順に尋ねられました。ある者たちは、キリスト者への自分の憎しみから、神々の仇であり、国の宗教の敵である者たちは除くべきだと述べました。違う考えの者たちも、副帝の望みを察すると、恐れから、あるいは取り入ろうとして、同じ意見に加わりました。11:7 それでも皇帝は、心を動かされて同意することはありませんでした。何よりも神々に伺いを立てようと決め、腸卜師をミレトスのアポロのもとへ送りました。アポロは、神の宗教の敵らしい答えを返しました。11:8 こうして皇帝は、もとの考えから引き離されました。側近にも、副帝にも、アポロにも逆らえなかったので、せめてもの手加減を守ろうとしました。この事を、血を流さずに行うよう命じたのです。副帝のほうは、供え物を拒む者たちを生きたまま焼こうとしていました。

12:1 事を行うのにふさわしい、縁起のよい日が探されました。そして、とりわけ選ばれたのが、境の神テルミヌスの祭りでした。二月二十三日です。この宗教に、いわば終わりの境を置こうというのです。『その日こそ、死の初め、災いの

初めのもととなった』。その災いは、迫害を企てた者たち自身にも、全世界にも降りかかりました。12:2 その日が明けました。二人の老帝が、それぞれ八度目と七度目の執政官を務める年のことです。まだ薄暗いうちに、突然、道長官が、将軍や大隊長や会計官たちを連れて教会に来ました。扉をこじ開けると、神の像が探されました。見つかった聖書は焼かれ、すべての者に略奪が許されました。奪い合い、うろたえ、駆け回る騒ぎになりました。12:3 ディオクレティアヌスと副帝は、物見の場所から見ていました。教会は高いところに建っていて、宮殿から見えたのです。二人は、いっそ火をつけるべきかどうかを、長いあいだ言い争いました。12:4 勝ったのは、ディオクレティアヌスの意見でした。大きな火事になれば、町のどこかが燃えてしまうと用心したのです。多くの大きな家が、四方から教会を取り囲んでいたからです。12:5 そこで近衛兵たちが、隊列を組み、斧やほかの鉄の道具を手にやって来ました。彼らは四方から送り込まれ、あの高くそびえる聖堂を、数時間で地面と同じ高さにしてしまいました。

13:1 翌日、勅令が掲げられました。中身は次のとおりです。この宗教の人々は、どの身分、どの位の出であっても、すべての名誉と地位を失い、拷問を受けるものとする。彼らに対しては、どんな訴えも成り立つ。しかし彼ら自身は、危害についても、姦淫についても、奪われた物についても、訴えを起こすことはできない。要するに、自由も発言の権利も持たない、というのです。13:2 ある人が、その勅令を引きはがし、ずたずたに裂きました。正しいこととは言えませんが、勇気のある行いでした。彼はあざけって、「ゴート人とサルマティア人に勝った知らせが掲げられたぞ」と言ったのです。13:3 彼はすぐに引き立てられ、拷問台でねじられただけでなく、型どおりに火であぶられもしました。そして驚くほどの忍耐を保ったまま、最後には焼き尽くされました。

14:1 しかし副帝は、勅令の定めでは満足しませんでした。そこで、別のやり方でディオクレティアヌスに仕掛けようとしました。14:2 彼は、ディオクレティアヌスをこの上なく残酷な迫害へと駆り立てようとしました。そして、ひそかな手下を使い、宮殿に火をつけさせたのです。その一部が燃え落ちると、キリスト者たちが国家の敵として訴えられました。大きな憎しみの中で、宮殿とともに、キリスト者の名も燃え上がりました。彼らは宦官たちと相談して、皇帝たちを亡き者にしようとした。二人の皇帝は自分の住まいで、あやうく生きたまま焼かれるところだった、というのです。14:3 ディオクレティアヌスは、いつも自分を抜け目のない賢い者に見せたがる人でした。それなのに、何一つ見抜けませんでした。かえって怒りに燃え、ただちに自分の家の者をみな拷問にかけるよう命じました。14:4 彼は自ら座って、罪のない人々を火で責めました。文官たちもみな同じでした。さらに、宮殿にいた役人の長たちもみな、権限を与えられて拷問しました。14:5 彼らは、だれが先に何かを見つけるかを競い合いました。しかし、どこからも何も出てきませんでした。副帝の家の者は、だれも拷問されなかったからです。副帝はその場にいて、しつこくせき立て、思慮のない老人の怒りが燃え尽きるのを許しませんでした。14:6 ところが十五日たって、彼はまた別の火事を企てました。今度はもっと早く気づかれましたが、それでも火をつけた者は分かりませんでした。14:7 すると副帝は、冬のさなかだというのに、出発の支度を整え、その日のうちに飛び出していきました。「生きたまま焼かれないうちに、おれは逃げる」と言いふらしながらです。

15〜17章　迫害の広がりとディオクレティアヌスの病

15:1 こうして皇帝は、もはや家の者に対してだけでなく、すべての人に対して荒れ狂いました。そしてだれよりも先に、娘のウァレリアと妻のプリスカに、供え物をささげて身を汚すよう強いました。15:2 かつて絶大な力を持っていた宦官たちは殺されました。宮殿も、皇帝自身も、以前は彼らに支えられていたのです。長老たちと奉仕者たちは捕らえられました。そして証拠も自白もないまま有罪とされ、身内の者みなとともに連れ去られました。15:3 あらゆる性別と年齢の人々が、焼き殺されるために引き立てられました。あまりに多かったので、一人ずつではなく、ひとまとめに火で取り囲まれました。皇帝の家の者たちは、首に石臼を結びつけられ、海に沈められました。15:4 ほかの人々にも、迫害は劣らず激しく襲いかかりました。裁判官たちが、あらゆる神殿に散らばり、すべての人に供え物を強いたのです。15:5 牢はいっぱいになり、聞いたこともない拷問のやり方が考え出されました。また、軽々しくだれかの訴えを裁くことのないように、奥の間にも法廷の壇の前にも祭壇が置かれました。訴えごとのある人々が、まず供え物をささげ、それから自分の言い分を述べるためです。こうして人々は、まるで神々のもとへ行くように、裁判官のもとへ行くことになりました。15:6 マクシミアヌス（ヘルクリウス）とコンスタンティウスにも、同じことをせよとの手紙が送られていました。これほどの大事なのに、二人の意見は待たれなかったのです。老いたマクシミアヌスは、イタリアじゅうで喜んで従いました。もともと、あまり情け深い人ではなかったのです。15:7 一方、コンスタンティウスは、上の皇帝たちの命令に背いていると見られたくありませんでした。そこで、集会所、すなわち建て直すことのできる壁を壊すことは許しました。しかし、人々の内にある神のまことの神殿は、損なわずに守りました。

16:1 こうして、全地が苦しめられました。ガリアを除いて、東から西まで、三頭のきわめて凶暴な獣が荒れ狂っていたのです。16:2 『たとえわたしに百の舌、百の口、鉄の声があっても、罪の形を残らず語り、罰の名をすべて数えることはできない』。裁判官たちが属州のいたるところで、正しい人々、罪のない人々に加えた罰は、それほど多かったのです。16:3 しかし、親愛なるドナトゥスよ、とりわけあなたに、それを語る必要があるでしょうか。あなたはほかのだれにもまして、荒れ狂う迫害の嵐を身をもって味わったのですから。16:4 あなたは、まず長官フラッキヌスの手に落ちました。並の人殺しではない男です。次に、道長官の代理から長官になったヒエロクレスの手に落ちました。迫害を起こした張本人で、その相談役でもあった男です。最後に、その後任のプリスキッリアヌスの手に落ちました。そしてあなたは、打ち負かされることのない強さの証しを、すべての人に示したのです。16:5 あなたは九度、拷問とさまざまな責め苦にかけられ、九度、栄えある告白によって敵に打ち勝ちました。九度の戦いで、悪魔とその手下どもを打ち破り、九度の勝利で、世をその脅しもろとも打ち負かして凱旋したのです。16:6 それは、神にとってどれほど喜ばしい見世物だったことでしょう。神は、勝利者となったあなたをご覧になりました。あなたが戦車につないでいたのは、白い馬でも巨大な象でもありません。ほかならぬ凱旋将軍たちを、自分の戦車につないでいたのです。16:7 これこそ本当の凱旋です。支配する者たちが支配されるのですから。彼らはあなたの勇気に負け、屈服させられました。あなたは忌まわしい命令を退け、暴君の権力のあらゆる仕掛けと脅しを、揺るがない信仰と強い心で打ち砕いたからです。16:8 鞭も、鉄の爪も、火も、刃も、さまざまな拷問も、あなたには何の力も持ちませんでした。あなたから信仰と献身を奪うことは、どんな力にもできませんでした。16:9 これこそ神の弟子であることです。これこそキリストの兵士であることです。どんな敵もこの兵士を攻め落とせず、どんな狼も天の陣営から奪い去れません。どんな罠も誘い込めず、どんな痛みも打ち負かせず、どんな責め苦も打ちのめせないのです。16:10 そしてついに、悪魔は、あなたに打ち負かされたあの九度の輝かしい戦いの後、それ以上あえてあなたと戦おうとはしませんでした。これほど多くの戦いで、あなたが打ち

負かされない人だと思い知ったからです。16:11 勝利の冠があなたのために用意されていたので、悪魔はもう挑むのをやめました。あなたがここで冠を受けることのないようにです。その冠を、あなたは今はまだ受けていません。それでも、あなたの勇気と功績にふさわしく、主の御国で、損なわれないまま取っておかれています。さて、話の順序に戻りましょう。

17:1 こうしてこの悪事をなし終えると、すでに幸運に見放されていたディオクレティアヌスは、すぐにローマへ向かいました。そこで即位二十年の記念の日を祝うためです。その日は十一月二十日に来ることになっていました。17:2 祝いが終わると、彼はローマの民の自由な物言いに耐えられず、いらだち、心を乱して、都を飛び出しました。一月一日が迫っていました。その日には、彼に九度目の執政官の職が授けられることになっていたのです。17:3 あと十三日をがまんして、ラウェンナではなくローマで執政官の就任の行列に臨むことさえ、できなかったのです。こうして彼は厳しい冬のさなかに旅立ち、寒さと雨に打たれて、軽いけれども治らない病にかかりました。そして道中ずっと病に苦しみ、たいていは輿に乗せられて運ばれました。17:4 こうして夏を過ごしたのち、彼はイステル川（ドナウ川）の岸を回ってニコメディアに着きました。病はもう重くなりつつありました。病に押しつぶされそうだと感じながらも、彼は人前に運び出されました。自分が造った戦車競走場を、即位二十年の祝いから一年がたったところで奉献するためです。17:5 その後、彼はひどく弱りました。そのため、あらゆる神々に、彼のいのちのための祈りがささげられました。やがて十二月十三日、宮殿に突然嘆きが起こりました。文官たちには悲しみと涙、町じゅうにはおびえと沈黙が広がりました。17:6 人々はもう、彼が死んだだけでなく、葬られたとまで言っていました。ところが翌朝、突然、彼は生きているというわさが広まりました。家の者たちや文官たちの顔は、喜びの色に変わりました。17:7 副帝（ガレリウス）が来るまで、皇帝の死が隠されているのではないか、と疑う者もいました。兵士たちが何か変事を起こしてはいけないから、というのです。17:8 この疑いはたいへん強く、だれも彼が生きているとは信じませんでした。三月一日に、彼が人前に出てくるまでのことです。そのとき彼は、ほとんど見分けがつかないほどでした。ほとんど一年のあいだ、病でやせ衰えていたのです。17:9 実は彼は、十二月十三日に、死の眠りに落ちていたのでした。いのちは取り戻しましたが、そのすべてではありませんでした。正気を失い、ある時は狂い、ある時は正気に戻るようになったのです。

18〜19章　ディオクレティアヌスの退位

18:1 それから幾日もたたないうちに、副帝（ガレリウス）がやって来ました。義父に祝いを述べるためではありません。義父に支配を退かせるためです。彼はつい先ごろ、老いたマクシミアヌス（ヘルクリウス）とぶつかり、内乱の恐れを突きつけておびえさせていたのです。18:2 そこで副帝は、まず穏やかに、親しげにディオクレティアヌスに働きかけました。あなたはもう年老いた、もう体も弱って、国を治めるのに向かない、苦労の後には休むべきだ、というのです。また同時に、ネルウァという手本も持ち出しました。ネルウァは支配をトラヤヌスに譲ったではないか、というのです。18:3 しかしディオクレティアヌスは言いました。あれほど高い位の輝きの後で、卑しい暮らしの闇に落ちるのは見苦しい。そのうえ安全でもない。これほど長い支配のあいだに、多くの人の恨みを買ってきたのだから、というのです。18:4 ネルウァのほうは、たった一年治めただけだった。これほどの大事の重さと心労を、年のせいか、慣れないためか、担いきれなかった。それで国の舵を投げ出し、私人の暮らしに戻ったのだ。もともと、その暮らしの中で年老いた人だった。しかし、副帝が皇帝の名を得たいというのなら、皆が正帝と呼ばれればよい。それを妨げるものは何もない、というのです。18:5 しかし副帝は、すでに望みの中で全世界をわがものにしていました。これでは自分には名のほかに何も加わらないか、加わっても大したものではないと見て、こう答えました。あなた自身が定めた仕組みは、いつまでも守られるべきだ。国には上位の者が二人いて全権を握り、また下位の者が二人いて、それを助ける。二人のあいだなら和合はたやすく保てるが、対等の四人のあいだでは決して保てない、というのです。18:6 あなたが退こうとしないなら、自分の身は自分で考える。これ以上、下位で最後の者のままではいない。もう十五年になる。そのあいだ自分は、イリュリクム、すなわちドナウ川の岸に追いやられ、蛮族と戦ってきた。ほかの者たちは、もっと広く穏やかな地で、気楽に治めているというのに、というのです。18:7 これを聞いた老人は、すっかり弱っていました。すでに老いたマクシミアヌスから、副帝の言ったことを残らず書き送る手紙を受け取っていました。副帝が軍を増やしていることも知っていました。そこで老人は涙ながらに言いました。「そうなるがよい。それがよいというのなら」。18:8 残るのは、全員の合議によって副帝たちを選ぶことでした。副帝は言いました。「合議など何になる。おれたちが何をしようと、あの二人はそれをよしとするほかないのだ」。ディオクレティアヌスは答えました。「そのとおりだ。あの二人の息子たちを指名しなければならないのだから」。18:9 ところで、マクシミアヌス（ヘルクリウス）には、息子のマクセンティウスがいました。いま話している当のマクシミアヌス（ガレリウス）の婿です。破滅をもたらす、たちの悪い心の持ち主でした。ひどく高慢で強情だったので、父にも義父にも拝礼する習いがありませんでした。そのため、二人ともに憎まれていました。18:10 コンスタンティウスにも、コンスタンティヌスという息子がいました。この上なく清らかな若者で、あの高い位にまことにふさわしい人でした。体つきは際立って立派で、戦の働きもあり、品行は正しく、比べるもののないほど気さくでした。そのため兵士たちに愛され、私人たちからも望まれていました。彼はそのとき、その場に居合わせていました。ずっと前に、ディオクレティアヌスによって第一級の大隊長に任じられていたのです。18:11 ディオクレティアヌスは言いました。「では、どうするのだ」。副帝は言いました。「あの男はふさわしくない。まだ私人のうちからおれを侮っていた者が、支配を受けたら何をするか分からない」。ディオクレティアヌスは言いました。「だが、こちらは人に好かれる男だ。父よりもすぐれ、父よりも情け深いと言われるように治めるだろう」。副帝は言いました。「そうなれば、おれは思うようにできなくなる。だから、おれの手の内にあって、おれを恐れ、おれの命令なしには何もしない者たちを指名しなければならない」。18:12 ディオクレティアヌスが「では、だれを立てるのか」と尋ねると、「セウェルスだ」と副帝は言いました。ディオクレティアヌスは言いました。「あの踊り手で、酔い

どれの大酒飲みをか。夜を昼とし、昼を夜としている男ではないか」。「ふさわしい」と副帝は言いました。「兵士たちを忠実に率いてきたからだ。それに、もうマクシミアヌス（ヘルクリウス）のもとに送ってある。紫の衣を着せてもらうためだ」。18:13 ディオクレティアヌスが「よかろう。もう一人はだれを出すのか」と言うと、「この男だ」と副帝は言い、ダイアを指し示しました。半ば蛮族の若者で、副帝がつい先ごろ、自分の名にちなんでマクシミヌスと呼ばせることにした男です。ディオクレティアヌスも、かつて縁起をかついで、副帝自身の名を一部変えていたからです。マクシミアヌス（ヘルクリウス）が、この上なく誠実に信義を守っていたためでした。18:14 ディオクレティアヌスが「おまえが差し出すこの男は何者だ」と問うと、「おれの身内だ」と副帝は言いました。老人はうめいて言いました。「おまえがよこすのは、国の守りを託せるような者たちではない」。「おれが見きわめた者たちだ」と副帝は言いました。ディオクレティアヌスは言いました。「それはおまえが考えればよい。支配の舵取りを引き受けるのはおまえなのだから。18:15 わたしは十分に苦労し、自分が治めるあいだ国が無事に立つよう心を配ってきた。何か悪いことが起こっても、わたしの落ち度ではない」。

19:1 こうして事が決まると、五月一日に、一同は進み出ました。皆がコンスタンティヌスを見つめていました。だれも疑っていませんでした。居合わせた兵士たちも、軍団から選ばれて呼び寄せられた兵士の主だった者たちも、この一人だけに目を注いでいました。そして喜び、望み、願いをかけていました。19:2 町の外、三マイルほどのところに高い場所がありました。その頂で、マクシミアヌス（ガレリウス）自身もかつて紫の衣をまとったのです。そこには、ユピテルの像を載せた柱が立てられていました。一同はそこへ向かいました。19:3 兵士たちが集会に呼び集められました。老人は涙ながらに口を開き、兵士たちに語りかけました。自分はもう弱った。苦労の後の休みを求め、支配をもっと強い者たちに譲る。代わりにほかの者たちを副帝に立てる、というのです。皆が、彼が何を告げるのかと、息をこらして待ちました。19:4 すると彼は、いきなり、セウェルスとマクシミヌスを副帝とすると告げました。皆は呆然としました。壇の上には、コンスタンティヌスが立っていました。人々は、コンスタンティヌスの名が変えられたのかと、いぶかり合いました。そのとき、皆の見ている前で、マクシミアヌス（ガレリウス）が手を後ろに伸ばしました。そしてコンスタンティヌスを押しのけ、背後からダイアを引き出しました。ダイアの私人の服を脱がせ、真ん中に立たせたのです。19:5 皆は、これはだれか、どこの者かと驚きました。しかし、思いもよらない事の新しさに、皆がうろたえていたので、異を唱える勇気のある者はいませんでした。ディオクレティアヌスは、自分が脱いだ紫の衣をこの男に着せかけました。こうして彼自身は、ふたたびディオクレスになったのです。19:6 それから一同は下りていきました。退役した王は車で町を通って外へ運び出され、故郷へ帰されました。一方ダイアは、つい先ごろ家畜と森から拾い上げられたばかりでした。その男が、すぐに盾兵となり、続いて親衛兵、やがて大隊長、そして翌日には副帝となりました。そして東方を受け取りました。踏みにじり、踏み砕くためです。軍のことも国のことも知らない男だったのですから。いまや家畜の群れではなく、兵士たちの群れを飼う者となったのです。

20〜23章　ガレリウスの支配

20:1 マクシミアヌス（ガレリウス）は、二人の老人を追い払って望みを遂げると、もう自分ひとりが全世界の主人だと言いふらしました。コンスタンティウスは、先に名を挙げなければならない人でしたが、彼はこの人を侮っていました。コンスタンティウスは生まれつき穏やかで、体の病にも妨げられていたからです。20:2 彼は、コンスタンティウスがほどなく死ぬだろうと見込んでいました。死なくても、意に反してでもその位をはぐのはたやすいと思われました。三人から支配を退くよう迫られたら、コンスタンティウスに何ができたでしょうか。20:3 彼自身には、リキニウスという男がいました。昔、同じ陣営で暮らした友で、軍に入ったときからの親しい仲でした。彼は何を治めるにも、この男の意見を用いていました。しかし、この男を副帝にしようとはしませんでした。副帝にすれば、息子と呼ばなければならなくなるからです。彼は後で、コンスタンティウスの代わりに、リキニウスを正帝、また兄弟分と呼ぼうとしていたのです。20:4 そのときこそ、彼自身が皇帝の首座を握るつもりでした。思うままに世界に荒れ狂ったあげく、即位二十年の祝いを催すつもりでした。そして、そのとき九歳だった自分の息子を代わりに副帝に立て、自分も支配を退くつもりでした。こうして、リキニウスとセウェルスが支配の頂を握ることになります。マクシミヌスとカンディディアヌスは、副帝という第二の名を持ちます。そうなれば彼は、破られることのない城壁に囲まれて、安らかで穏やかな老年を過ごせるはずでした。20:5 彼のたくらみは、ここを目指していました。しかし彼は、神を自分の敵にしていました。神は、彼の思いめぐらしたことをすべて崩しておしまいになりました。

21:1 こうして最大の権力を手にすると、彼は、自分で切り開いた世界を苦しめることに心を向けました。21:2 彼はペルシャ人を打ち負かしましたが、ペルシャ人には、自分たちの王に身をささげて奴隷となるしきたりがあります。王もまた、自分の民を家の奴隷のように扱います。この非道な男は、その後、このしきたりをローマの地に持ち込もうとしました。あの勝利の時から、彼は恥じることもなくこのしきたりをほめていたのです。21:3 それを公然と命じることはできなかったので、彼は、自分もまた人々から自由を奪うように事を運びました。まず、位の特権を取り上げました。町の議員だけでなく、町の主だった人々、高い位の称号を持つ人々までが、彼のもとで拷問を受けました。それも、軽い民事の訴えのためです。死に値すると見られれば、十字架が立っていました。そうでなければ、足かせが用意されていました。21:4 自由人に生まれた、身分の高い奥方たちが、機織り場へ引き立てられました。だれかを鞭打つことになると、家畜小屋に四本の杭が打ち込まれて立っていました。奴隷でさえ、これに縛られて引き伸ばされることは決してなかったのです。21:5 彼の遊びや楽しみのことを、どう語ればよいでしょうか。彼は、凶暴さも体の大きさも自分にそっくりの熊を飼っていました。支配のあいだずっと選び集めてきた熊です。楽しみたくなると、そのうちの一頭を名指しで連れて来させました。21:6 熊には人間が投げ与えられました。食われるというより、飲み込まれるためです。人々の手足が引き裂かれると、彼はいかにも心地よさそうに笑いました。人の血を見ずに夕食をとることは、決してありませんでした。21:7 位のない人々には、火の刑がありました。この死に方を、彼は初めキリスト者に対して許していました。法を出して、有罪とされた者を拷問の後にとろ火で焼くよう定めたのです。21:8 縛り上げると、まず足の下に弱い火を置きました。火で縮んだ足の裏の硬い皮が、骨からはがれるまで続けたのです。21:9 次に、火をつけてから消したたいまつを、手足の一つひとつに押し当てました。体のどこにも、無傷のところが残らないようにしたのです。そのあいだ、顔には冷たい水を注ぎかけ、口を水でぬらしました。のどが渇いて干からび、すぐに息が絶えてしまわないためです。21:10 それでも最後には息が絶えました。一日の大半をかけて皮膚がすっかり焼けただれ、火の力が体の奥

の臓腑にまで届いたときです。それから薪の山を積み、すでに焼かれた体を焼きました。21:11 骨は拾い集めて粉に砕き、川や海に投げ捨てました。

22:1 こうして彼は、キリスト者を責めさいなむうちに覚えたことを、その習いのままに、すべての人に行いました。22:2 彼のもとでは、軽い刑はありませんでした。島流しも、牢獄も、鉱山送りもありません。火と十字架と獣が、彼のもとでは毎日のことで、手軽なものでした。22:3 家の者や、仕事を任された者たちは、槍で罰せられました。死罪の裁きで剣による処刑を恵みのように与えられたのは、ごくわずかの人だけでした。昔の功績のために、良い死に方を許された人々です。22:4 しかし、ここまで述べたことも、次のことに比べれば軽いものでした。弁論は消し去られ、弁護人は除かれ、法律家は追放されるか殺されました。学問は悪い術の一つに数えられ、学問を知る者は、仇や敵のように踏みにじられ、のろわれました。22:5 法は解かれ、彼は何事も思うままにふるまう勝手を自分のものとし、裁判官たちにも与えました。学問の教養のない軍人の裁判官たちが、法の補佐役も付けられずに属州へ送り込まれました。

23:1 しかし、国の災いとなり、すべての人の共通の嘆きとなったのは、属州と町々に一斉に送られた課税の調査でした。調査官たちが至るところに散らばってあらゆるものをかき回したので、敵の襲来か、恐ろしい捕囚のような有様になりました。23:2 畑は土くれの一つひとつまで測られ、ぶどうの木も果樹も数えられ、あらゆる種類の家畜が書き留められ、人の頭数が記されました。町々には町の民も田舎の民も集められました。広場はどこも、家ごとの群れでいっぱいになりました。だれもが子供と奴隷を連れて出て来ました。拷問と鞭の音が響き渡りました。息子たちは親に不利な証言をさせるために吊るされました。最も忠実な奴隷たちも主人に不利な証言をさせるために、妻たちも夫に不利な証言をさせるために責められました。23:3 それでも何も得られないと、本人が自分に不利な証言をさせるために拷問を受けました。痛みに負けると、持っていない物までが書き加えられました。23:4 年のためにも、病のためにも、免除はありませんでした。病人も体の弱い人も運び込まれました。一人ひとりの年が見積もられ、幼い子には年が足され、老人からは年が引かれました。どこもかしこも嘆きと悲しみに満ちていました。23:5 昔の人々が戦争のならいで負けた者に行ったことを、彼もまた、ローマ人とローマの支配下の人々にあえて行ったのです。彼の先祖が、課税の調査に服させられていたからです。トラヤヌスが勝者として、絶えず背くダキア人を罰するために課したものでした。23:6 その後、頭ごとに金が払われ、命の代金が納められました。それでも、同じ調査官は信用されず、もっと見つけるだろうと、次から次へと別の者が送られました。税はいつも倍になりました。調査官たちは何も見つけなくても、むだに送られたと思われないよう、好きなだけ書き足したのです。23:7 そのあいだにも家畜は減り、人々は死んでいきました。それでも、死んだ人の分まで税が納められました。生きることも、死ぬことさえも、ただではできなくなったのです。残ったのは、何も取り立てられない物乞いたちだけでした。みじめさと不幸が、あらゆる害から彼らを守っていたのです。23:8 ところが、この敬虔な男は、彼らが困らないようにとあわれみました。彼らを残らず集めさせ、小舟で沖へ運び出して、海に沈めさせたのです。なんとあわれみ深い男でしょう。自分の治める世に、みじめな人がひとりもいないよう計らったのです。23:9 こうして彼は、物乞いのふりをして調査を逃れる者がないよう気を配るあまり、まことにみじめな人々を大勢殺したのです。人の道のあらゆるおきてに背くことでした。

24〜26章　コンスタンティヌスの即位とマクセンティウス

24:1 いまや、マクシミアヌス（ガレリウス）に神の裁きが近づいていました。彼の権勢が崩れ、流れ去り始める時がやって来たのです。24:2 彼はまだ、コンスタンティウスを倒すか追い払うかに心を向けてはいませんでした。先に述べたことにかかりきりだったからです。それに、彼はコンスタンティウスの死を待っていました。ただ、これほど早く死ぬとは思っていませんでした。24:3 コンスタンティウスは重い病にかかると、手紙を送りました。自分の息子コンスタンティヌスに会いたいので、帰してほしいというのです。この息子のことは、もうずっと前から返すよう求めていましたが、かなわずにいました。24:4 しかし彼は、何よりもそれを望みませんでした。というのも、彼はこの若者を、たびたび陰謀でねらっていたのです。公然とは、あえて何もしなかったからです。内乱の武器が自分に向けられ、何より恐れていた兵士たちの憎しみをかき立てることになるからです。また、訓練と遊びにかこつけて、若者を獣の前に投げ出したこともありました。24:5 しかし、むだでした。神が御手でこの人を守っていてくださったからです。神は、まさに瀬戸際で、若者を彼の手から救い出してくださいました。彼は何度も頼まれて、もう長く断り続けることができなくなりました。そこで、日の傾くころに、若者に通行の許しの印を与えました。そして、翌朝に指図を受けてから出発するよう命じました。何かの口実で自分が引き留めるか、先に手紙を送ってセウェルスに捕らえさせるつもりだったのです。24:6 若者はそれを見抜きました。夕食の後、皇帝がもう休んでいるあいだに、急いで出て行きました。そして、多くの宿駅で駅伝の馬をみな連れ去りながら、飛ぶように去りました。24:7 翌日、皇帝は、わざと昼まで眠ってから、若者を呼ぶよう命じました。若者は夕食の後すぐに発ったと告げられました。皇帝は憤り、怒りにうめき始めました。若者を連れ戻させるために、駅伝の馬を求めました。しかし、駅伝には馬が残っていないと知らされました。皇帝は涙をこらえるのがやっとでした。24:8 一方、コンスタンティヌスは信じられないほどの速さで、もう衰えきった父のもとにたどり着きました。父は息子を兵士たちに託し、自分の手から支配を渡しました。こうして父は、望んでいたとおり、自分の床の上で、生涯を終えて休みを得ました。24:9 支配を受け継ぐと、正帝コンスタンティヌスは、何よりも先に、キリスト者を彼らの礼拝と神のもとに返しました。これが、聖なる宗教を立て直す、彼の最初の定めでした。

25:1 数日の後、月桂冠をかぶった彼の肖像が、あの悪い獣のもとに届けられました。獣は、これを受け入れるかどうか、長いあいだ思い迷いました。25:2 彼はもう少しで、肖像も、それを持って来た者も焼いてしまうところでした。しかし、側近たちがその狂気から彼を引き戻しました。危ないことになると忠告したのです。兵士たちはみな、見知らぬ者たちが自分たちの意に反して副帝にされたことを不満に思っていました。そのため、コンスタンティヌスが兵を率いて来れば、こぞって彼を迎え、喜び勇んで彼のもとに駆けつけるだろうというのです。25:3 そこで彼は、ひどく不本意ながら肖像を受け入れ、コンスタンティヌスに紫の衣を送りました。自分から進んで、仲間に加えたように見せるためです。25:4 彼のもくろみは、もう乱されていました。思っていたとおりに、数を超えてもう一人を立てることは、できなくなったのです。25:5 そこで、彼は次のことを考え出しました。年の進んだセウェルスを正帝と呼ぶことにしました。そしてコンスタンティヌスは、立てられたとおりの皇帝ではなく、マクシミヌスと並ぶ副帝と呼ばせました。彼を第二の位から第四の位へ押し下げるためです。

26:1 彼には、事がどうにか収まったように見えていました。そのとき突然、別の恐ろしい知らせが届きました。彼の婿のマクセンティウスが、ローマで皇帝にされたというのです。この騒ぎの原因は、こうでした。26:2 彼は、課税の調査を行って全世界を食い尽くそうと決めていました。そして、ついには、ローマの民さえもこの捕囚から免れさせまいとするほどの狂気に走ったのです。ローマに送られて民を書き記す調査官たちが、もう任じられていました。26:3 ほぼ同じこ

ろ、彼は近衛兵の陣営も廃止していました。そこで、ローマの陣営に残されていたわずかな兵士たちが、この機をとらえました。彼らは役人を何人か殺し、マクセンティウスに紫の衣を着せたのです。民も騒ぎ立っていて、これを嫌がりませんでした。26:4この知らせが届くと、彼は事の思いがけなさにいくらかうろたえました。しかし、それほど恐れはしませんでした。彼はマクセンティウスを憎んでいましたし、副帝を三人にすることもできませんでした。望まないことを一度したので、もう十分だと思われたのです。26:5彼はセウェルスを呼び寄せ、支配を取り戻すよう励ましました。そして、マクシミアヌス（ヘルクリウス）の軍を付けて、マクセンティウスを攻め落とすために送り出しました。しかも、ローマへ送り出したのです。その兵士たちは、それまでたびたびローマでこの上なくぜいたくにもてなされていました。そのため、この都が無事であることを願っていただけでなく、そこで暮らしたいとさえ願っていました。26:6マクセンティウスは、自分がどれほどの大罪を犯したかを知っていました。父の兵士たちを、相続の権利によって自分の側に引き入れることもできました。それでも、こう考えました。義父のマクシミアヌス（ガレリウス）は、まさにそれを恐れるだろう。そして、セウェルスをイリュリクムに残し、みずから自分の軍を率いて攻めて来ることもありうる。そこで彼は、迫っている危険から身を守る手立てを探しました。26:7彼は、支配を退いた後カンパニアに住んでいた自分の父に紫の衣を送り、再び正帝と呼びました。父は、もともと新しい事を好み、しかも不本意ながら支配を退いた人でしたから、喜んでそれに飛びつきました。26:8その間に、セウェルスは進軍し、兵を率いてローマの城壁に迫りました。すると、兵士たちはすぐに軍旗を掲げて去り、攻めに来たはずの当のマクセンティウスに、身を引き渡しました。26:9見捨てられた者に、逃げるほかに何が残っていたでしょうか。しかし、すでに支配を取り戻したマクシミアヌス（ヘルクリウス）が、迎え撃とうと向かって来ました。セウェルスは、彼がやって来るとラウェンナに逃げ込み、わずかな兵士とともに立てこもりました。26:10セウェルスは、マクシミアヌスに引き渡されることになると見て取ると、自分から降伏しました。そして、紫の衣を、かつて自分にそれを授けた当人に返しました。26:11そうしても、彼が得たのは良い死に方だけでした。血管を切られ、穏やかに死ぬよう強いられたのです。

27〜30章　ガレリウスのイタリア侵入とマクシミアヌスの最期

27:1 一方、ヘルクリウスは、マクシミアヌス（ガレリウス）の狂気をよく知っていたので、こう考え始めました。彼はセウェルスが殺されたと聞けば、怒りに燃え、敵意を抱いて、軍を率いて攻めて来るだろう。もしかするとマクシミヌスを味方に付け、兵力を倍にして来るかもしれない。そうなれば、とうてい防ぎようがない。そこでヘルクリウスは、都の守りを固め、すべてを念入りに整えてから、ガリアへ向かいました。下の娘を嫁がせて、コンスタンティヌスを自分の側に引き入れるためです。27:2 その間に、マクシミアヌスは軍を集めてイタリアに攻め込み、ローマの都に迫りました。元老院を滅ぼし、民を殺し尽くすつもりだったのです。しかし、どこもみな閉ざされ、守りが固められていました。押し入る望みはなく、攻め落とすのは難しく、城壁を取り囲むには兵が足りませんでした。彼はローマを一度も見たことがなく、自分の知っている町々とたいして変わらない大きさだと思っていたのです。27:3 そのとき、いくつかの軍団が、この罪を忌み嫌いました。義父が婿を攻め、ローマの兵士がローマを攻めるというのです。彼らは軍旗を移し、彼の支配から離れました。27:4 ほかの兵士たちも、もう揺らいでいました。そのとき、彼は高ぶりをくじかれ、気力を失いました。そしてセウェルスのような最期を恐れ、兵士たちの足もとにひれ伏して、敵に引き渡さないでくれと頼みました。こうして、莫大な約束をしてようやく兵士たちの心を変えると、軍旗を後ろへ返し、うろたえて逃げ出しました。この逃走のさなかなら、だれかがわずかな兵を連れて追って来るだけで、たやすく討たれたでしょう。27:5 彼はそれを恐れたので、兵士たちに許しを与えました。できるかぎり広く散らばって、何もかも奪い、あるいは壊してよいというのです。追って来ようとする者があっても、使える物が何もないようにするためでした。27:6 こうして、イタリアのうち、あの災いの軍が通った地方は荒らされました。何もかも奪われ、女たちは汚され、乙女たちは辱められました。親や夫たちは拷問にかけられ、娘や妻や財産のありかを明かすよう責められました。家畜や荷を運ぶ獣が、蛮族から奪うかのように、獲物として追い立てられて行きました。27:7 このようにして、彼は自分の領地へ引き上げました。かつてはローマの皇帝であった者が、今やイタリアを荒らす者となり、敵のようにすべてを苦しめたのです。27:8 もっとも、彼はずっと前、皇帝の名を受けたときから、自分はローマの名の敵だと公言していました。そして、その呼び名を変えて、ローマの帝国ではなく、ダキアの帝国と呼ばせたいと思っていたのです。

28:1 彼が逃げ去った後、もう一人のマクシミアヌス（ヘルクリウス）がガリアから戻って来て、息子と支配を分け合いました。しかし、人々は老人よりも若者に従いました。息子の権力のほうが先にあり、大きかったからです。父に支配を返したのも、この息子でした。28:2 老人は、思いどおりに振る舞えないことに我慢がならず、子供じみた対抗心から、自分の息子をねたんでいました。そこで、若者を追い出して、自分のものを自分の手に取り戻そうと考えました。それはたやすいことに思えました。彼には、セウェルスを見捨てた兵士たちがついていたからです。28:3 彼は、国が今直面している災いについて集会を開くかのように、民と兵士たちを呼び集めました。そして、そのことを長々と語った後、両手を息子に向けました。この者こそ災いの張本人だ、国が耐えている不幸の元凶だと言いながら、息子の肩から紫の衣をはぎ取ったのです。28:4 衣をはがれた息子は、壇から真っ逆さまに身を投げ、兵士たちに受け止められました。兵士たちの怒りと叫びに、不敬虔な老人はうろたえました。そして、もう一人の傲慢王（タルクイニウス）のように、ローマの都から追い出されました。

29:1 彼は再びガリアへ戻り、そこでしばらくとどまりました。それから、息子の敵であるマクシミアヌス（ガレリウス）のもとへ出かけて行きました。国の立て直しについて彼と話し合うという名目でした。しかし本当は、和解の機会を利用して彼を殺し、その領分を奪うためでした。自分の領分からは、どこへ行っても締め出されていたのです。29:2 そこには、少し前に婿に呼ばれたディオクレス

（ディオクレティアヌス）も来ていました。婿は、前にはしなかったことを、彼の立ち会いのもとで行おうとしたのです。つまり、リキニウスをセウェルスの後に据えて、支配を与えることです。こうして、二人が立ち会うなかで、それは行われました。このようにして、同じ時に六人の皇帝がいることになりました。29:3 このことで企てをくじかれた老いたマクシミアヌス（ヘルクリウス）は、これで三度目の逃亡をくわだてました。悪だくみと罪に満ちて、ガリアに戻ったのです。皇帝コンスタンティヌスを、策略にかけて陥れるためでした。コンスタンティヌスは、彼の婿であり、婿の息子でもありました。そして、欺きやすくするため、王の衣を脱ぎました。そのころ、フランク人が武器を取っていました。29:4 彼は、何も疑わないコンスタンティヌスに、軍をみな連れて行くには及ばない、わずかな兵で蛮族は討ち破れる、と説きました。自分が奪える軍を手に入れ、相手は兵が少ないので討ち取れるようにするためです。29:5 若者は、経験のある年長者として彼を信じ、義父として従いました。そして、兵士の大半を残して出発しました。老人は数日待ちました。コンスタンティヌスがもう蛮族の地に入ったころだと思うと、突然紫の衣をまといました。そして宝庫を押さえ、いつものように気前よく金をばらまきました。コンスタンティヌスについて作り話もしましたが、それはすぐに自分の身に跳ね返ってきました。29:6 皇帝のもとに、起こったことがすぐに知らされました。皇帝は驚くほどの速さで、軍を率いて引き返しました。男は不意を襲われました。まだ十分に備えができていなかったのです。兵士たちは、自分たちの皇帝のもとに戻りました。29:7 彼はマッシリア（マルセイユ）を押さえ、門を閉ざしていました。皇帝は近くまで進み、城壁の上に立つ彼に呼びかけました。荒々しくもなく、敵に向かうようでもなく、ただ尋ねたのです。何をしようとしたのか、何が足りなかったのか、なぜほかのだれよりも彼がしてはならないことをするのか、というのです。しかし彼は、城壁の上から悪口を浴びせるばかりでした。29:8 そのとき突然、彼の背後で門が開かれ、兵士たちが中に迎え入れられました。逆らった皇帝、不敬虔な父、不実な義父は、皇帝の前に引き出されました。彼は自分の犯した罪を聞かされ、衣をはぎ取られました。そして、とがめを受けた上で、命を許されました。

30:1 こうして皇帝の位と義父の誉れを失うと、彼は低い身分に耐えられず、再び別の陰謀をめぐらしました。一度は罰を受けずに済んだからです。30:2 彼は娘のファウスタを呼び、あるいは頼み込み、あるいは甘い言葉でそそのかして、夫を裏切らせようとしました。もっとふさわしい別の夫を約束しました。そして、寝室を開けたままにし、見張りを手薄にさせてくれと頼みました。30:3 ファウスタは、そうすると約束し、すぐに夫に知らせました。罪の現場を押さえるための芝居が仕組まれました。身分の低い宦官が一人、皇帝の身代わりに死ぬよう置かれました。30:4 老人は真夜中に起き上がりました。見ると、何もかも陰謀に都合よくなっていました。見張りはまばらで、しかも離れたところにいました。それでも彼は見張りたちに、夢を見たので息子（婿のコンスタンティヌス）に話したいのだと言いました。彼は武器を持って入り、宦官を斬り殺すと、得意げに飛び出して来て、自分のしたことを言い立てました。30:5 そのとき突然、反対の側からコンスタンティヌスが、武装した一団を連れて姿を現しました。殺された者の死体が寝室から運び出されました。人殺しは現場を押さえられて立ちすくみ、口もきけずに呆然としていました。『固い火打ち石か、マルペッソスの岩が立っているかのよう』でした。彼は不敬虔と罪をとがめられました。最後に、死に方を自分で選ぶことを許されました。そして、『高い梁に、醜い死の輪縄を結んだ』のです。30:6 こうして、ローマの名を負う最も偉大な皇帝は、その忌まわしい生涯を、恥ずべき不名誉な死で終えました。長い時を隔てて、大いなる栄光のうちに即位二十年の祝いを行った人です。この上なく傲慢なその喉は、締めつけられ、砕かれたのです。

31〜35章　ガレリウスの病と寛容の勅令

31:1 宗教とご自分の民のために報いる神は、ヘルクリウスから、もう一人のマクシミアヌス（ガレリウス）へと目をお移しになりました。忌まわしい迫害を始めた張本人です。神は、彼の上にもご自分の威光の力をお示しになろうとしたのです。31:2 彼もまた、即位二十年の祝いを行うことを、もう考えていました。彼はずっと前から、金と銀の課税で属州を苦しめていました。そして、約束したものを果たすため、祝いの名目でも、属州に第二の斧を振り下ろしたのです。31:3 この取り立てが、とりわけ穀物の取り立てが、人々をどれほど苦しめて行われたかを、だれがふさわしく語れるでしょうか。あらゆる役所の兵士たちが、いや、むしろ死刑執行人たちが、一人一人にまとわりつきました。だれの求めに先に応じればよいのか、分かりませんでした。持たない者にも許しはありませんでした。ないものをすぐに差し出さなければ、さまざまな拷問に耐えなければなりませんでした。31:4 大勢の見張りに取り囲まれた人には、息をつく暇もなく、一年のどの時期にも、わずかな休みさえありませんでした。同じ人々をめぐって、裁判官どうしが、あるいは裁判官の兵士どうしが、たびたび争いました。脱穀場には必ず取り立て役がおり、ぶどうの収穫には必ず見張りがいました。働く者には、食べていく分さえ何も残されませんでした。こうしたことは耐えがたいものです。それでも、骨折って得た食べ物を口から奪われることは、せめて先々に望みをかけて、どうにかこらえることができます。31:5 では、あらゆる種類の衣服はどうでしょうか。金は、銀はどうでしょうか。これらは、作物を売って買い求めるほかないではありませんか。「この上なく狂った暴君よ、おまえは作物をみな持ち去り、生えるものをすべて力ずくで奪い取る。それなら、わたしはどこからこれらを差し出せばよいのか」31:6 こうして、財産を失って破滅しなかった人が、いったいいたでしょうか。彼の支配のもとにあった富は、祝いのためにかき集められました。それも、彼が行うことのない祝いのためにです。

32:1 さて、リキニウスが皇帝と呼ばれると、マクシミヌスは怒りました。そして、副帝と呼ばれることも、三番目の位で呼ばれることも、望みませんでした。32:2 そこでマクシミアヌス（ガレリウス）は、たびたび彼に使者を送って頼みました。自分に従い、自分の定めた序列を守り、年長の者に譲り、白髪に敬意を払ってくれ、というのです。32:3 しかしマクシミヌスは、いっそう大胆に角を振り上げ、どちらが先かを盾にして争いました。先に紫の衣をまとった自分こそ、位も先であるべきだというのです。そして、マクシミアヌスの願いも命令も、はねつけました。32:4 獣は悲しみ、うなり声を上げました。名もない男を副帝にしたのは、自分に従わせるためでした。それなのに、あの男はこれほどの恩を忘れて、自分の意向と願いに不敬虔にも逆らう、というのです。32:5 マクシミアヌスは、その強情に負けて、副帝という名を廃しました。そして、自分とリキニウスを正帝と呼び、マクシミヌスとコンスタンティヌスを正帝たちの息子と呼びました。その後、マクシミヌスは手紙を書いてきました。先ごろ練兵場で開かれた集会で、自分は軍から正帝と呼ばれたと、知らせるかのようにです。マクシミアヌスは悲しみ嘆きながら、これを受け入れました。そして、四人をみな皇帝と呼ばせることにしました。

33:1 マクシミアヌスの支配は、もう十八年目に入っていました。そのとき、神は彼を、癒えることのない一撃でお打ちになりました。陰部の下のほうに悪いできものが生じ、だんだん広がっていきました。33:2 医者たちは切開し、手当てをしました。しかし、傷がもうふさがったところで、傷口が裂け、血管が破れて、死ぬかと思われるほど血が流れました。それでも、血はやっと止まりました。手当ては、また初めからやり直されました。そしてついに、傷はふさがりました。33:3 ところが、体を少し動かしただけで、また傷が開き、前よりも多くの血が流れ出ました。彼は血の気を失って白くなり、力が尽きてやせ衰えました。そのときは、どうにか血の流れは止まりました。33:4 傷には、薬が効かなくなり始めま

した。腐れが近くのところを次々に冒し、切り取れば切り取るほど、いっそう広がり、手当てをすればするほど、大きくなりました。『名医たちも手を引いた。ピリュラの子ケイロンも、アミュタオンの子メランプスも』というありさまでした。名高い医者たちが、あちこちから連れて来られました。しかし、人の手では何もできませんでした。33:5 人々は偶像に頼りました。アポロとアスクレピオスに祈り、治す手立てを求めました。アポロが治療を授けました。すると、病はずっとひどくなりました。33:6 もう破滅は遠くありませんでした。病は下のほうをすっかり冒していました。はらわたは外から腐っていき、尻はすっかり腐って崩れ落ちました。それでも、哀れな医者たちは、病に勝つ望みもないまま、温めたり手当てをしたりするのをやめませんでした。33:7 薬に押し返された病は、内へと戻って、体の内側を捕らえました。体の中には虫がわきました。その臭いは、宮殿じゅうに広がるだけでなく、町全体にまで及びました。それも不思議ではありません。もう便と尿の出口が一つになっていたのです。33:8 彼は虫に食われ、耐えがたい痛みのうちに、体は腐って崩れていきました。そして『同時に、恐ろしい叫びを星々にまで上げる。傷ついた雄牛が祭壇から逃れるときの、うなり声のように』というありさまでした。33:9 流れ出す尻のところに、煮て熱くした動物があてがわれました。その熱で虫をおびき出すためです。それを取りのけると、数えきれないほどの虫の群れがうごめいていました。それでも、腐っていくはらわたの実り豊かな破滅は、それよりはるかに多くの虫を生み出していたのです。33:10 もう、上と下で違う病のために、体のどちらの部分も、元の姿を失っていました。上の半身は、傷のところまで干からびていました。哀れにやせ衰え、土気色の皮膚が、骨と骨のあいだに深く落ちくぼんでいました。下の半身は足の形もなく、皮袋のようにふくれ上がっていました。33:11 こうしたことが、まる一年続きました。そしてついに、彼は災いに打ち負かされ、神を認めないわけにいかなくなりました。責め立てる新たな痛みの合間合間に、神の神殿を建て直し、罪の償いをすると叫びました。そして、いよいよ力が尽きかけたとき、次のような勅令を送ったのです。

34:1 われわれは、国の益と利のために、常にさまざまなことを定めている。その中で、われわれは以前、ローマ人の古い法と公の規律に従って、すべてを正そうと望んだ。そして、先祖の教えを捨てたキリスト者たちも、正しい考えに立ち返るよう、手を打とうとしたのである。34:2 というのも、どういうわけか、このキリスト者たちを、ひどい強情がとらえ、ひどい愚かさが支配していたからである。彼らは、もしかすると初めは彼ら自身の先祖が定めたかもしれない、あの昔の人々の定めに従わなかった。かえって、自分の思うままに、好き勝手に、守るべき法を自分たちで作り、あちこちでさまざまな人々を集めていたのである。34:3 こうして、昔の人々の定めに戻るよう、われわれの命令が出されると、多くの者は危険に屈し、また多くの者は打ち倒された。34:4 そして、大多数の者はその考えを変えなかった。神々にふさわしい礼拝と敬いをささげることもなく、キリスト者の神をあがめることもしないのを、われわれは見た。そこで、われわれは、この上なく穏やかな自らの情け深さを顧みた。また、すべての人に許しを与えるという、変わらぬ習わしに目を向けた。そして、この者たちにも、われわれの恩恵を快く差し伸べるべきだと考えた。すなわち、彼らが再びキリスト者であることと、自分たちの集会所を建てることを認める。ただし、規律に反することは何もしないという条件においてである。34:5 裁判官たちには、守るべきことを、別の書簡で知らせるつもりである。それゆえキリスト者たちは、われわれのこの恩恵にかなって、自分たちの神に祈らなければならない。われわれの安全と、国の安全と、自分たちの安全のためにである。こうして、国がどこからも損なわれずに保たれ、彼らも自分の住まいで安心して暮らせるようにするためである。

35:1 この勅令は、ニコメディアで四月三十日に掲げられました。マクシミアヌス（ガレリウス）自身が八度目、マクシミヌスが二度目の執政官を務める年です。35:2 そのとき牢獄が開かれ、親愛なるドナトゥスよ、あなたもほかの告白者たちとともに、獄から解き放たれました。牢獄が六年のあいだ、あなたの住まいだったのです。35:3 しかし彼は、こうしたからといって、神から罪の許しを受けたのではありません。数日の後、彼は妻と息子をリキニウスに託し、その手に委ねました。そして、もう全身の手足が溶け崩れていくなかで、恐ろしい腐敗に食い尽くされて死にました。35:4 このことがニコメディアに知らされたのは、五月

の某日[1]でした。即位二十年の祝いを、来たる三月一日に控えていたときのことです。

訳注

1 原文は日付の語を欠く。『半ば』『終わり』などと補う説がある。

36〜41章　マクシミヌスの暴政とウァレリア

36:1 マクシミアヌス（ガレリウス）の死の知らせを聞くと、マクシミヌスは東方から駅伝の馬を手配して、飛ぶように駆けつけました。属州を押さえ、リキニウスがぐずぐずしているあいだに、カルケドンの海峡までのすべてを自分のものにするためです。そしてビテニヤに入ると、さしあたり人々の好意を得ようとして、課税の調査を取りやめました。皆は大いに喜びました。36:2 二人の皇帝のあいだに争いが起こり、戦いになりかけました。彼らは武器を取って、海峡の両岸に陣を構えました。しかし、取り決めた条件のもとで平和と友好が結ばれ、海峡の上で盟約が交わされて、二人は右手を握り合いました。36:3 マクシミヌスは安心して戻ると、シリヤとエジプトにいたころと同じ男になりました。何よりもまず、皇帝たちが連名でキリスト者に与えた恩恵を取り消しました。裏で手を回して町々に使節を送らせ、町の中にキリスト者が集会所を建てることを許さないよう、願い出させたのです。説かれ、強いられ、押されてするように見せかけるためでした。もともと自分から進んでするつもりだったのです。36:4 彼はその願いを聞き入れ、新しいやり方で、町ごとに主だった人々から一人ずつ大祭司を立てました。彼らは毎日すべての神々に供え物をささげ、昔からの祭司たちの務めに支えられて、手を尽くすことになっていました。キリスト者が集会所を建てることも、公にも私にも集まることもないようにするためです。そして、捕らえた者を、自分の権限で供え物に強いるか、裁判官に引き渡すことになっていました。36:5 それでも足りず、属州ごとに、さらに高い位から一人ずつを、いわば神祇官のような者として、その上に置きました。そして、その両方の祭司に、白い外套をまとって歩くよう命じました。36:6 彼は、東方の地でずっと前からしていたことを、ここでもしようとしていました。うわべだけ情け深さを掲げて、神のしもべたちを殺すことは禁じ、その体を損なうよう命じたのです。36:7 こうして告白者たちは、目をえぐられ、手を切り落とされ、足を断ち切られ、鼻や耳をそぎ落とされました。

37:1 このようなことをたくらんでいた彼は、コンスタンティヌスの手紙に恐れをなして、思いとどまりました。そこで、本心を隠しました。それでも、だれかが彼の手に落ちると、その人はひそかに海に沈められました。宮殿で毎日供え物をささげる習わしも、やめませんでした。37:2 また、彼が初めて考え出したことがあります。自分が食べる動物はすべて、料理人ではなく祭司たちが、祭壇でいけにえにしなければならないというのです。食卓には、初物を取り分けたもの、供え物にしたもの、ぶどう酒を注いだもののほかは、何一つ出されませんでした。こうして、食事に招かれた人はだれでも、汚れて清くない身となって、そこから出て行ったのです。37:3 ほかのことでも、彼は師に似ていました。ディオクレス（ディオクレティアヌス）やマクシミアヌス（ガレリウス）が何か残していれば、彼はそれを削り取り、恥じることなく何もかも持ち去ったのです。37:4 それで、人々の穀倉は閉ざされ、蔵には封印がされ、先の年の分まで税が取り立てられました。こうして、畑は実っているのに飢饉が起こり、聞いたこともないほど物価が高くなりました。37:5 牛や羊の群れが、毎日の供え物のために畑から奪われていきました。彼はその肉で自分の兵たちをすっかり堕落させ、兵たちは配給の糧食を見下すほどになりました。また彼は、見境もなく、際限もなく、あちこちに財をばらまきました。数のたいへん多い護衛の全員に、高価な衣と金貨で報いました。並の兵と新兵には銀貨を与え、蛮族はあらゆる施しでもてなしました。37:6 彼は、生きている人々の財産を奪ったり、それを贈り物として自分の者たちに与えたりしました。だれかが他人のものを求めれば、そのとおりにしたのです。このことでは、彼にはむしろ礼を言うべきだったのかもしれません。情け深い盗賊のように、血を流さずに分捕り物をはいだのですから。

38:1 しかし、これまでのどの皇帝にもまさる、あの何より重い悪は、女を汚す欲でした。盲目で抑えのきかない欲、としか言いようがありません。それでも、事が呼び起こす憤りに見合うほど、この言葉で言い表すことはできません。罪の

大きさが、舌の務めに勝ってしまったのです。38:2 宦官や女衒たちが、あらゆるところを探し回りました。顔立ちの美しい女がいれば、どこでも、父も夫も身を引かなければなりませんでした。身分の高い女たちも、乙女たちも、衣をはがれ、手足を一つ一つ調べられました。体のどこにも、皇帝の寝床にふさわしくないところがないようにするためです。拒んだ女は、水に沈めて殺されました。あの姦夫のもとでは、貞潔が大逆罪であるかのようでした。38:3 妻を辱められた人々の中には、自ら命を絶った者もいました。妻の貞潔と誠実のゆえに、彼らは妻を何よりいとしく思っていたので、その痛みに耐えられなかったのです。この怪物のもとでは、貞潔を守り通せた女はどこにもいませんでした。ただ、ひどく醜い顔立ちが、野蛮な欲を退けたところだけは別でした。38:4 ついに彼は、こんな習わしまで持ち込みました。だれも彼の許しなしに妻をめとってはならないというのです。どの婚礼でも、自分が真っ先に味わう者となるためです。38:5 生まれの自由な乙女たちを汚しては、自分の奴隷たちに妻として与えました。側近たちも、このような皇帝のもとで、その淫らな交わりをまね、自分を泊めてくれた主人たちの寝床を、罰も受けずに汚しました。だれが報いを加えられたでしょうか。中ほどの身分の人々の娘は、それぞれが気の向くままにさらっていきました。さらうことのできない身分の高い家の娘は、恩賞として願い出て手に入れました。皇帝が署名した以上、拒むことは許されませんでした。死ぬか、どこかの蛮人を婿に迎えるか、二つに一つしかなかったのです。38:6 というのも、彼のそば近くに仕える供回りは、ほとんどみな、ある民族の者たちだったからです。即位二十年の祝いのころ、ゴート人に自分の土地を追われた人々です。彼らはマクシミアヌス（ガレリウス）に身をゆだねていました。それが人類の災いとなりました。蛮族の奴隷となることから逃げてきた者たちが、ローマ人の上に立って支配するようになったのです。38:7 こうした護衛と親衛兵に囲まれて、彼は東方をもてあそびました。

39:1 ついに彼は、自分の欲にこんな掟を与えました。望んだものは何であれ、許されたものと考えるというのです。そして、ついこのあいだ母と呼んだ皇后にさえ、手を出さずにいられませんでした。39:2 マクシミアヌスが死んだ後、ウァレリアは彼のもとに来ていました。彼の領分にいるほうが安全だと思ったのです。とりわけ、彼には妻がいたからです。39:3 しかし、この忌まわしい生き物は、たちまち欲に燃え上がりました。女はまだ喪服を着ていて、喪の期間も終わっていませんでした。彼は先に使者を送り、妻にしたいと申し入れました。願いがかなえば、今の妻を追い出すつもりでした。39:4 彼女は、彼女にしかできない答えを、ためらわずに返しました。第一に、自分の夫で、あなたの父である人の灰がまだ温かいうちに、このような喪の装いで、結婚の話などできない。第二に、あなたに忠実な妻を離縁するのは、不敬虔なことだ。あなたは同じことを、きっと自分にもするだろう。最後に、自分のような名と地位にある女が、ならわしにも先例にもなく、二人目の夫を持つのは、許されないことだ、というのです。39:5 彼女があえて言ったことが、男に伝えられました。欲は怒りと狂気に変わりました。彼はすぐに彼女を罪人として告示し、財産を奪い、付き従う者たちを取り上げ、宦官たちを拷問にかけて殺しました。彼女自身は母とともに追放しました。それも決まった所ではなく、あちらこちらへとあざけりながら追い立てたのです。そして、彼女と親しい女たちを、姦淫の罪をでっち上げて断罪しました。

40:1 たいへん身分の高い女がいました。若い息子たちから、もう孫も生まれていました。ウァレリアは、この人をもう一人の母のように慕っていました。マクシミヌスは、ウァレリアが自分を拒んだのはこの人の勧めによると疑いました。そこで長官エラティネウス[1]に命じて、この人に汚名を着せて殺させようとしました。40:2 これに、同じく身分の高いほかの二人の女が加えられました。一人は、ウェスタの乙女である娘をローマに残してきた人で、そのころひそかにウァレリアと親しくしていました。もう一人は元老院議員を夫に持つ人で、皇后とそれほど親しくはありませんでした。しかし二人とも、すぐれた体の美しさと貞潔のゆえに殺されたのです。40:3 女たちは、にわかに連れ去られました。行き先は裁判ではなく、盗賊の手でした。訴える者は、一人もいなかったからです。そこで、ほかの悪事で訴えられていた一人のユダヤ人が見つけ出されました。罰を免れる望みにつられて、罪のない女たちに対して偽りを言わせるためです。公正で行き届いた裁判官は、石で打ち殺されないよう、護衛をつけて、その男を町の外へ連れ出しました。この悲劇は、ニカイアで演じられました。40:4 ユダヤ人に拷

問が加えられ、彼は言えと命じられていたことを言いました。女たちは言い返さないように、拷問吏たちのこぶしで押さえつけられました。罪のない女たちを刑場へ引いて行くよう、命令が下りました。泣き声と嘆きの声が上がりました。それは、そこにいた夫が、よく尽くした妻を思って上げたものだけではありません。このひどい、聞いたこともない出来事に集まった、すべての人の嘆きでした。40:5群衆の勢いで、女たちが死刑執行人の手から奪い取られるおそれがありました。そこで、隊の形に組んだ選り抜きの騎兵、重装の騎兵、弓兵が付き従いました。こうして女たちは、武装した兵の隊に挟まれて、刑場へ引かれて行きました。40:6家の者たちが逃げ散ってしまったので、女たちは葬られずに打ち捨てられるところでした。友人たちが、ひそかにあわれんで葬らなかったなら、そうなっていたでしょう。姦夫と偽った男にも、約束された罰の免除は果たされませんでした。彼は刑木にかけられ、たくらみの一部始終を明かしました。そして息を引き取る間際に、見ていたすべての人に、殺された女たちは罪がなかったと証言したのです。

41:1皇后は、シリヤのある荒れ野に追放されました。彼女は、ひそかな使いによって、父ディオクレティアヌスに自分の災いを知らせました。41:2ディオクレティアヌスは使者を送り、娘を自分のもとに返すよう、マクシミヌスに頼みました。しかし、何の役にも立ちませんでした。何度も繰り返し願いましたが、娘は返されませんでした。41:3ついに彼は、身内のある人を送りました。軍人で、力のある人でした。マクシミヌスに、ディオクレティアヌスから受けた恩を思い出させて、願うためです。しかし、この人も使いを果たせず、願いがむだに終わったことを伝えました。

訳注

1 名は伝わる本文が崩れていて確かでない。『ビテニヤの長官』と読む説もある。

42〜44章　ディオクレティアヌスの死とムルウィウス橋の戦い

42:1 同じころ、コンスタンティヌスの命令で、老いたマクシミアヌス（ヘルクリウス）の像が引き倒されました。ヘルクリウスが描かれているところでは、どこでも肖像が取り外されました。二人の老帝はたいてい一緒に描かれていたので、二人の肖像が一緒に下ろされることになりました。42:2 こうしてディオクレティアヌスは、これまでどの皇帝の身にも起こらなかったことを、生きているうちに見ることになりました。心と体の二重の病に冒されて、彼は死のうと心に決めました。苦しみに心が煮えたぎり、眠りも食べ物も取らずに、右へ左へと身をよじりました。ため息をつき、うめき、しきりに涙を流しました。体は休みなく、あるときは寝床の上で、あるときは地べたで転げ回りました。42:3 こうして、二十年のあいだこの上なく幸いな皇帝だった人は、神によって低い暮らしに落とされました。辱めに踏みにじられ、生きることを憎むまでに追いやられて、ついに飢えと苦しみのうちに息絶えたのです。

43:1 神の敵のうち、残っていたのはもうマクシミヌスただ一人でした。今から、その最期と没落を書き添えましょう。43:2 マクシミヌスは、リキニウスに張り合う心を抱いていました。リキニウスのほうが、マクシミアヌス（ガレリウス）によって上に立てられたからです。ついこのあいだ、リキニウスと友好を固めたばかりでした。それでも、コンスタンティヌスの妹がリキニウスと婚約したと聞くと、彼は考えました。二人の皇帝のこの縁組みは、自分に対抗して結ばれたのだ、と。43:3 そこで彼も、ひそかにローマへ使節を送り、マクセンティウスとの同盟と友好を求めました。親しげな手紙も書き送りました。使節は手厚く迎えられ、友好が結ばれて、二人の肖像が並べて置かれました。43:4 マクセンティウスは、これを神の助けのように喜んで受け入れました。彼はすでに、父の死の仇を討つかのようにして、コンスタンティヌスに戦いを宣していたからです。43:5 そのため、こんな疑いが生まれていました。あの破滅をもたらす老人は、息子との不和を装っていたのではないか。それは、ほかの者たちを切り倒す道を開くためだった。皆を除いたうえで、自分と息子のために全世界の支配を手に入れようとしたのだ、というのです。43:6 しかし、それは誤りでした。彼のもくろみは、息子もほかの者たちも滅ぼして、自分とディオクレティアヌスを支配の座に戻すことだったのです。

44:1 すでにコンスタンティヌスとマクセンティウスのあいだには、内乱の戦いが始まっていました。マクセンティウスはローマにこもっていました。都の門の外へ出れば滅びる、という託宣を受けていたからです。それでも戦いは、ふさわしい将軍たちによって進められていました。44:2 マクセンティウスのほうが兵力にまさっていました。父の軍をセウェルスから引き取っていたうえに、自分の軍も、つい先ごろマウリ人とガエトゥリ人から集めていたからです。44:3 戦いが交えられ、マクセンティウスの兵たちが優勢でした。やがてコンスタンティヌスは心を奮い立たせ、どちらに転んでもよいと覚悟を決めました。そして全軍を都の近くに進め、ムルウィウス橋（ミルウィウス橋）の向かいに陣を構えました。44:4 マクセンティウスが支配を手にした日、十月二十七日が迫っていました。即位五年の祝いの年も、終わろうとしていました。44:5 コンスタンティヌスは眠りの中で、神の天の印を盾に記し、そうしてから戦いを始めるよう告げられました。彼は命じられたとおりにしました。☧の字を横向きにし、その上の端を曲げた形で、キリストを盾に記したのです。44:6 この印で身を固めた軍は、剣を取りました。敵は皇帝を欠いたまま迎え撃ちに出て、橋を渡りました。両軍の戦列は互角の構えでぶつかり、双方が力を尽くして戦いました。まさに『こちらの兵も、あちらの兵も、逃げることを知らなかった』というありさまでした。44:7 都では騒ぎが起こりました。指導者のマクセンティウスは、国の安全を見捨てた者のようになじられました。彼はちょうど、即位の記念日を祝って戦車競走を催していました。彼が姿を見せると、民はにわかに声を一つにして叫びました。「コンスタンティヌスが負けるはずはない」44:8 マクセンティウスはこの声にうろた

えて飛び出し、元老院議員を何人か呼び集めて、シビュラの書を調べるよう命じました。すると、その書の中に『その日、ローマ人の敵が滅びる』という言葉が見つかりました。44:9 この託宣で勝利を望むようになった彼は、出陣して戦場に来ました。彼の背後で、橋が断ち切られました。それを見て、戦いはいっそう激しくなりました。神の御手が、戦列を守っておられました。マクセンティウスの兵はおびえて浮き足立ちました。彼自身も逃げ出して、断ち切られていた橋へ急ぎました。しかし、逃げる者たちの群れに押されて、ティベリス川に突き落とされたのです。44:10 こうして、この上なく激しい戦いがついに終わりました。コンスタンティヌスは皇帝として、ローマの元老院と民の大きな喜びのうちに迎えられました。そして彼は、マクシミヌスの裏切りを知りました。手紙を押さえ、像と肖像を見つけたのです。44:11 元老院は、コンスタンティヌスの武勇をたたえて、第一の名の称号を贈ることを決めました。それは、マクシミヌスが自分のものだと言い張っていた称号でした。都が解き放たれた勝利の知らせがマクシミヌスに届くと、彼はまるで自分が負けたかのように受け取りました。44:12 それから元老院の決議を知ると、彼は悔しさに燃え上がりました。敵意をあらわに口にし、冗談を交えた悪口を、この最も偉大な皇帝に浴びせるほどでした。

45〜47章　リキニウスとマクシミヌスの戦い

45:1 コンスタンティヌスは、都のことを整えると、次の冬にミラノへ移りました。リキニウスも同じ所へ来ました。妻を迎えるためです。45:2 マクシミヌスは、二人が婚礼の儀式にかかりきりになっていると知ると、シリヤから軍を動かしました。冬がまさにいちばん荒れていたときです。宿駅を二つずつ進む強行軍でビテニヤへ駆けつけました。隊列は弱りきっていました。45:3 大雨と雪とぬかるみと寒さと疲れのために、あらゆる種類の荷役の獣が失われたのです。道に沿って獣が無残に倒れている有様は、来たる戦いの姿を、早くも示していました。そして兵士たちにも、同じような滅びが待っていることを告げていたのです。45:4 マクシミヌス自身は、自分の領分の内にとどまってはいませんでした。すぐに海峡を渡り、武装してビザンティウムの門に迫ったのです。そこには、このような事態に備えてリキニウスが置いた守備兵たちがいました。マクシミヌスは、はじめは贈り物と約束で彼らを誘い込もうとし、次には力と攻撃で脅そうとしました。しかし、力も約束も、何の役にも立ちませんでした。45:5 すでに十一日が過ぎていました。そのあいだに、皇帝リキニウスに使者と手紙を送る時間はありました。そのとき兵士たちは、忠誠を捨てたからではなく、自分たちの数の少なさに望みを失って、降伏したのです。マクシミヌスはそこからヘラクレアへ進みました。そこでも同じようにして引き留められ、何日かの時を失いました。45:6 すでにリキニウスは、道を急いで、わずかな者たちとハドリアノポリスに来ていました。そのときマクシミヌスは、ペリントス（ヘラクレア）を降伏させて受け入れ、しばらくとどまったあとで、十八マイル先の宿駅まで進みました。それより先へは進めなかったのです。リキニウスがすでに、そこから同じだけ離れた次の宿駅を押さえていたからです。45:7 リキニウスは、近くから集められるだけの兵を集めて、マクシミヌスを迎え撃ちに向かいました。戦うつもりや勝つ望みからというより、彼を引き留めるためでした。マクシミヌスは七万の武装した兵の軍を率いていたのに、リキニウスは三万の数をやっと集めただけだったからです。45:8 兵士たちは、あちこちの地方に散らばっていました。時が迫っていたので、皆を一つに集めることができなかったのです。

46:1 こうして両軍が近づき、もう数日のうちに戦いが起こりそうに見えました。46:2 そのときマクシミヌスは、ユピテルに次のような誓いを立てました。勝利を得たら、キリスト者の名を消し去り、根こそぎ滅ぼす、というのです。46:3 するとその次の夜、休んでいたリキニウスのそばに、神の天使が立って告げました。すぐに起きて、全軍とともにいと高き神に祈りなさい。そうすれば、勝利はあなたのものになる、と。46:4 この言葉の後で、リキニウスは起き上がったように思いました。告げた当人もそばに立っていました。その者は、どのように、どんな言葉で祈ればよいかを彼に教えました。46:5 それから眠りから覚めると、リキニウスは書記を呼び寄せるよう命じました。そして聞いたとおりに、次の言葉を書き取らせました。46:6『いと高き神よ、あなたに願います。聖なる神よ、あなたに願います。すべての義を、あなたにゆだねます。わたしたちの安全を、あなたにゆだねます。わたしたちの支配を、あなたにゆだねます。あなたによって、わたしたちは勝利者となり、幸いを得ます。いと高き聖なる神よ、わたしたちの願いをお聞きください。わたしたちは、あなたに腕を差し伸べます。聖なる、いと高き神よ、お聞きください』46:7 この言葉は何枚もの紙に書かれ、指揮官たちと大隊長たちを通して配られました。めいめいが自分の兵士たちに教えるためです。皆の心は奮い立ちました。勝利が天から自分たちに告げられたと信じたからです。46:8 皇帝リキニウスは、五月一日に戦いを交えると決めました。その日で、マクシミヌスが立てられてから八年が満ちるのです。マクシミヌスがほかでもない自分の即位の記念日に負けるためでした。マクセンティウスがローマでそのように負けたのと同じです。46:9 マクシミヌスは、それより早く先手を打とうとしました。その前日の朝に戦列を整えたのです。翌日の自分の即位の記念日を、勝者として祝うためでし

た。マクシミヌスが動いたと、リキニウスの陣営に知らせが届きました。兵士たちは武器を取り、迎え撃ちに出ました。あいだには、セレヌスの野と呼ばれる、草木のない荒れた野が広がっていました。46:10 すでに両軍の戦列は、互いに見えるところにありました。リキニウスの兵たちは盾を下ろし、かぶとを脱いで、天に手を差し伸べました。指揮官たちが先に唱え、兵たちはそれに続いて、皇帝のために祈りを唱えました。滅びに向かう敵の戦列は、祈る者たちのつぶやきを耳にしました。46:11 リキニウスの兵たちは、祈りを三度唱えると、もう勇気に満たされていました。そしてかぶとを頭に戻し、盾を取り上げました。二人の皇帝は、話し合いのために進み出ました。46:12 しかしマクシミヌスを、和睦へ動かすことはできませんでした。マクシミヌスはリキニウスを侮っていたのです。リキニウスは兵に与えるのを惜しみ、マクシミヌスのほうは気前がよい。だから、リキニウスは兵たちに見捨てられるだろうと考えていました。もともとマクシミヌスは、このもくろみで戦いを起こしていました。戦わずにリキニウスの軍を手に入れ、二倍になった力で、すぐにコンスタンティヌスに向かうつもりだったのです。

47:1 こうして両軍はさらに近づき、ラッパが鳴り、軍旗が進みました。リキニウスの兵たちは突き進んで、敵に襲いかかりました。敵の兵たちはおびえきって、剣を抜くことも、投げ槍を投げることもできませんでした。47:2 マクシミヌスは戦列を回って、リキニウスの兵たちを、あるときは頼み込み、あるときは贈り物で誘おうとしました。しかし、どこでも耳を貸されませんでした。兵たちが彼に襲いかかり、彼は自分の兵のもとへ逃げ帰りました。マクシミヌスの戦列は、手向かいもできずに斬り倒されていきました。あれほどの数の軍団、あれほどの兵の力が、わずかな者たちによって刈り取られていったのです。47:3 だれも、名誉を顧みませんでした。だれも、武勇を顧みませんでした。だれも、これまでに受けた褒賞を顧みませんでした。彼らは、戦いにではなく、死に身を捧げるために来たかのようでした。そのようにして、いと高き神は、彼らを殺されるべき者として敵の手にお渡しになったのです。すでにおびただしい数の兵が倒れていました。47:4 マクシミヌスは、戦いが思っていたのと違う運びになっていくのを見ました。彼は紫の衣を投げ捨て、奴隷の衣を着て逃げ、海峡を渡りました。軍のうち、半分は倒れ、残りは降伏するか、逃げ出しました。見捨てて逃げた皇帝が、見捨てることへの恥を、兵たちから取り去っていたのです。47:5 マクシミヌスは五月一日に、すなわち一夜と一日のうちに[1]、次の夜にはニコメディアに着きました。戦いの場から百六十マイルも離れた町です。そして子供たちと妻と、宮殿のわずかな供を急いで連れて、東方を目指しました。47:6 しかしカパドキヤで、逃げてきた兵と東方からの兵を集めて、踏みとどまりました。こうして彼は、紫の衣を再びまといました。

訳注

1 原文はここで語を欠く。『逃げて』『海峡まで』などと補う説がある。

48〜52章　ミラノの勅令と迫害者たちの滅び

48:1 一方リキニウスは、軍の一部を受け入れて振り分けると、戦いから数日後に、軍をビテニヤに渡しました。そしてニコメディアに入ると、神に感謝をささげました。その神の助けによって勝ったからです。それから、コンスタンティヌスとリキニウス自身が三度目の執政官であった年の六月十三日に、書簡を掲げるよう命じました。教会を元に戻すことについて長官に宛てた、次のような書簡です。48:2 われコンスタンティヌス正帝と、われリキニウス正帝とは、幸いにもミラノで会した。そして、公の益と安全に関わるすべてのことを話し合った。そのとき、多くの人々の役に立つと見たほかの事柄の中でも、まず第一に定めるべきだと考えたことがある。神性への敬いに関わる事柄である。すなわち、キリスト者にも、すべての人にも、それぞれが望んだ宗教に従う自由な権限を与えることである。天の座にある神性が何であれ、それが穏やかで恵み深くあることができるようにするためである。われわれにも、われわれの支配の下に置かれたすべての人々にもである。48:3 それゆえ、われわれは、健全で、この上なく正しい考えに基づいて、次の方針をとるべきだと考えた。キリスト者の守り事にであれ、自分に最もふさわしいと感じる宗教にであれ、心をささげた者がいる。そのだれにも、その権限を決して拒むまい、というのである。こうして、至高の神性が、すべてのことにおいて、いつもの好意と慈しみをわれわれに示すことができるようにするためである。われわれは、その神性の宗教に、自由な心で従っているのである。48:4 それゆえ、貴官に知っておいてもらいたい。われわれは次のように定めた。キリスト者の名について、以前に貴官の役所に送った書面には、さまざまな条件が含まれていた。それらの条件はすべて、まったく取り除く。まったく不当で、われわれの情け深さにそぐわないと見えたものも、取り除く。そして今からは、キリスト者の宗教を守ろうという同じ意志を持つ者は、だれでも、自由に、何の条件もなく、それを守ってよい。そのことで、何の不安も煩いも受けることはない。48:5 このことを、われわれは貴官に余すところなく知らせるべきだと考えた。われわれが、このキリスト者たちに、自分たちの宗教を敬う、自由で何の制限もない権限を与えたことを、貴官が知るためである。48:6 われわれがこの者たちにこれを許したことを、貴官は見て取るであろう。そして貴官は、ほかの人々にも同じことが認められていると理解する。自分の宗教や守り事に従う権限が、同じように開かれた自由なものとして認められているのである。われわれの時代の平穏のためであり、各人が自分の選んだものを敬うことに、自由な権限を持つためである。われわれがこうしたのは、どのような名誉も、どのような宗教も、われわれが損なったと見えないようにするためである。48:7 さらに、キリスト者については、次のことも定めるべきだと考えた。彼らが以前に集まるのを常としていた場所がある。その場所については、前にも貴官の役所に送った書簡に、一定の決まりを書いておいた。だれかがその場所を、以前に、われわれの国庫から、あるいはほかのだれかから買い取ったとする。その者たちは、それをキリスト者に返さなければならない。代金を受けず、値の求めもいっさいせず、言い逃れも疑いも、すべて退けてである。48:8 また、その場所を贈り物として手に入れた者たちも、同じように、できるだけ早くこのキリスト者たちに返さなければならない。買い取った者も、贈り物として手に入れた者も、われわれの慈しみに何かを求めるなら、道長官の代理に申し出るがよい。われわれの情け深さによって、彼らにも配慮がなされるためである。これらはすべて、貴官の取り計らいによって、ただちに、遅れることなく、キリスト者の団体に引き渡されなければならない。48:9 また、このキリスト者たちは、集まるのを常としていた場所だけでなく、ほかのものも持っていたことが知られている。それは個々の人のものではなく、彼らの団体、すなわち諸教会の権利に属するものである。貴官は、それらもすべて、先に書いた法のとおりに、このキリスト者たち、すなわちその団体と集会に返させよ。疑いも争いも、いっさい残してはならない。もちろん、先に述べたやり方は守られる。すなわち、それを代金なしで返す者は、先に言った

とおり、われわれの慈しみによる償いを望んでよい。48:10 これらすべてのことにおいて、貴官は、先に言ったキリスト者の団体のために、最も効き目のある取り計らいをしなければならない。われわれの命令ができるだけ早く果たされるためである。このことにおいても、われわれの情け深さによって公の平穏が図られるためである。48:11 こうして、先に書いたとおり、われわれに向けられた神の好意が、いつの時にも続くことになる。その好意を、われわれはこれほど大きな事柄において身をもって知った。それが、われわれの成功を順調に運び、公の幸いとともに続くのである。48:12 さて、われわれのこの定めと慈しみの趣旨が、すべての人に知られるようにしなければならない。そのため、貴官は、この書面を貴官の布告によって公にし、至るところに掲げて、すべての人に知らせるべきである。われわれのこの慈しみの定めが、だれにも知られずに終わることのないようにするためである。48:13 この書簡が掲げられると、リキニウスは口でも、集会所を元の状態に戻すよう勧めました。こうして、教会が倒されてから元に戻されるまでに、十年と四か月ほどが経ちました。

49:1 リキニウスが軍を率いて、暴君マクシミヌスを追いました。暴君は逃亡者となって退き、再びタウルス山の狭い道を目指しました。そこに防壁と櫓を築いて、道をふさごうとしました。しかし、勝者たちがすべてを打ち破って進んでくると、そこからも追い落とされ、ついにタルソへ逃げ込みました。49:2 そこで、もう陸からも海からも攻め立てられ、どこにも逃げ場を望めなくなると、彼は心の苦しみと恐れから、死に逃げ込みました。神が彼の頭上にお下しになった災いを逃れる手立てであるかのように、死を選んだのです。49:3 しかし、その前に、彼は食べ物を腹に詰め込み、ぶどう酒をあおりました。これが最後だと思う者がよくするようにです。そうしてから毒を飲みました。毒の力は、満ちた胃にはね返されて、すぐには効きませんでした。かえって、疫病に似た悪い病に変わりました。そのため彼は、長く息をつないだまま、苦しみを味わうことになりました。49:4 毒は、もう彼の内で猛威を振るい始めていました。その力で胸の内が荒れ狂うと、彼は耐えがたい痛みのために、正気を失うほどに狂いました。四日のあいだ、狂気に駆られて、手で土をすくい、飢えた者のようにむさぼり食うほどでした。49:5 それから、多くの重い苦しみの後、彼が頭を壁に打ちつけると、目が眼窩から飛び出しました。視力を失ったそのときになって初めて、彼は神を見始めました。白い衣をまとった仕え人たちとともに、自分を裁いておられる神をです。49:6 そこで彼は、拷問される者がよくするように叫び声を上げ、自分ではなく、ほかの者たちがしたのだと言いました。それから、拷問に責められたかのように、白状しました。そして何度も、自分をあわれんでくださるようにと、キリストに願い、すがりました。49:7 こうして彼は、焼かれているかのようなうめき声を上げながら、忌まわしい死に方で、罪深い息を吐き出しました。

50:1 このようにして、神は、ご自分の名を迫害したすべての者をお滅ぼしになりました。彼らの幹も根も、何一つ残らないほどにです。50:2 というのも、リキニウスは、支配の全権を手にすると、真っ先にウァレリアを殺すよう命じたからです。マクシミヌスは、怒っていながら、逃げた後、自分が滅びるほかないと見たときでさえ、あえて彼女を殺しませんでした。リキニウスはまた、カンディアヌスを殺すよう命じました。ウァレリアが、子を産めないために養子にしていた、側女の生んだ子です。50:3 しかしウァレリアは、リキニウスが勝ったと知ると、身なりを変えて、その供の中に紛れ込んでいました。カンディディアヌスの運命を見届けるためです。カンディディアヌスは、ニコメディアで自分から姿を現し、重んじられているように見えていました。そのため、そのようなことを少しも恐れていませんでしたが、殺されてしまいました。彼女は、彼の最期を聞くと、すぐに逃げました。50:4 リキニウスはまた、セウェルスの息子セウェリアヌスを殺しました。彼はもう一人前の年齢で、戦場から逃げるマクシミヌスに付き従っていました。リキニウスは、彼がマクシミヌスの死後に紫の衣をまとおうと考えていたとして、死刑の判決を下したのです。50:5 これらの人々は皆、以前からリキニウスを悪人のように恐れていて、むしろマクシミヌスの側にいることを選んでいました。ただウァレリアは違いました。リキニウスは、マクシミアヌス（ガレリウス）の財産をすべて、彼女が相続の権利によって自分に譲ることを望みました。しかし彼女は、それを拒みました。そして同じものを、マクシミヌスにも拒んでいたのです[1]。50:6 リキニウスは、マクシミヌス自身の子供たちも殺しました。八歳になるいちばん上の息子と、七歳の娘です。娘はカンディディアヌスと婚約していました。しかしその前に、子供たちの母が、オロンテス

川に投げ込まれました。そこで彼女は、たびたび貞潔な女たちを沈めさせていたのです。50:7 こうして、不敬虔な者たちは皆、神のまことの正しい裁きによって、自分がしたのと同じことを受けたのです。

51:1 ウァレリアもまた、十五か月のあいだ、庶民の身なりで、あちこちの属州をさまよいました。そしてついにテサロニケで見破られ、母（プリスカ）とともに捕らえられて、罰を受けました。51:2 そこで二人の女は、刑場へ引かれていきました。大勢の者が見物し、これほどの転落をあわれみました。そして首を斬られ、その体は海に投げ捨てられました。こうして、二人には、貞潔と身分とが破滅のもとになったのです。

52:1 これらのことはすべて、事実に忠実に、起こったとおりに書き記すべきだと、わたしは考えました。知っている人に向けて語っているのですから。これほど大きな出来事の記憶が消えてしまわないようにするためです。また、だれかが歴史を書こうとしたときに、真実をゆがめることのないようにするためです。神に対する彼らの罪や、彼らに対する神の裁きを、黙って書かずにおけば、真実はゆがめられてしまいます。52:2 わたしたちは、神のとこしえの慈愛に感謝しなければなりません。神はついに地を顧みてくださいました。ご自分の羊の群れは、一部は強欲なおおかみに荒らされ、一部は散らされていました。神はその群れを立て直し、集め直してくださいました。そして悪い獣どもを根絶やしにしてくださいました。神の群れの牧場を踏み荒らし、そのねぐらを壊した獣どもです。52:3 諸国に名高かった、ヨウィウス、ヘルクリウスというあの華々しい称号は、今どこにあるでしょうか。その称号は、初めにディオクレス（ディオクレティアヌス）とマクシミアヌス（ヘルクリウス）が思い上がって名乗ったものでした。その後、後継者たちに移されて、勢いを振るいました。まさに、主がそれを消し去り、地から拭い去ってくださったのです。52:4 それゆえ、喜び躍って神の凱旋を祝いましょう。賛美の声で、主の勝利を繰り返し祝いましょう。昼も夜も祈りをもって祝いましょう。祝いましょう。十年の後にご自分の民に与えてくださった平和を、主がとこしえに固めてくださるように。52:5 とりわけ、親愛なるドナトゥスよ、神に聞き入れられるにふさわしいあなたは、主に願ってください。主が、恵み深く穏やかに、ご自分のしもべたちに、これからもあわれみを保ってくださるように。悪魔のあらゆるたくらみと攻撃を、ご自分の民から遠ざけてくださるように。花開く教会の、とこしえの平安を守ってくださるように。

訳注

1 原文が崩れた箇所。彼女がリキニウスに財産を譲る気でいたと読む説もある。

迫害者たちの死について

2026年11月23日版
著者　ラクタンティウス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/lactantius-deaths-of-persecutors/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/lactantius-deaths-of-persecutors
全文を、ラテン語原文（De mortibus persecutorum）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。